

第八章 古墳時代



人物埴輪（東灘区住吉東古墳）

第一節 前方後円墳の成立と発展

第二節 群集墳の時代

第一節 前方後円墳の成立と発展

1 最古の古墳

古墳の出現

中国の史書『三国志』魏志倭人伝に、三世紀中ごろのこととして、「卑弥呼以って死す、大いに冢つかを作る、径百余歩、徇葬する者、奴婢百余人」という記載がみえる。この「径百余歩」と記されている邪馬台国の女王卑弥呼の墓が、どの程度の規模のものであるかは不明であるし、日本においては殉葬の風習はこれまでに確認されていないので、この記載がどの程度まで信憑性しんぴやうをもつものであるかは明らかではない。しかし、三世紀中葉に大形の墳墓が出現していたことは確実であろう。それが、弥生墳丘墓と呼ばれるような墳墓であったのか、あるいは新しい時代を象徴する「古墳」と呼ばれるにふさわしい前方後円形の墳墓であったのかはまだ十分に明らかにされていない。

三世紀後葉から四世紀はじめにかけて、大和盆地の東北部、すなわち三輪山麓の地に巨大な前方後円ないしは前方後方形の古墳が出現するが、これまでに知られているかぎり、日本最古の前方後円墳は、この地に築造された箸墓古墳であろうといわれている。

第一節 前方後円墳の成立と発展

表 51 古墳時代略年表

期	年代	内 容	
前期	300年 ころ	前方後円墳の築造始まる 竪穴式石室に中国製三角 縁神獣鏡が副葬される	
		六甲南麓に前方後円墳築 かれる・ヘボン塚古墳 明石川・武庫川中流域に 小形方墳が築造される	
		日本製三角縁神獣鏡の副 葬始まる 明石川流域に前方後円墳 が築造される	
中期	400年 ころ	巨大前方後円墳の築造盛 行・五色塚古墳 長持形石棺の使用盛ん 武器・農工具の大量副葬 カマドをもつ住居始まる 小形前方後円墳・帆立貝 式古墳各地で築造される	
		500年 ころ	横穴式石室築造始まる 木棺直葬の群集墳盛行 馬具の副葬盛んになる 市域で須恵器生産始まる 舞子大形群集墳造営さる
			600年

前期古墳の特色
前期古墳の立地をみると、そこに葬られた人たちがかつて自ら支配した平野部の集落を見下ろすような丘陵上や尾根の先端部に築かれることが多いといわれている。墳丘の形態は三段に築

箸墓古墳は、陵墓参考地に指定されているため、学術的な発掘調査は行われていないが、墳丘の形態が前方部・後円部共に三段築成であることや、墳丘から発見された器台形埴輪・壺形土器などからみて、定形化した巨大な前方後円墳の最古例であることはほぼ間違いないであろう。この時期以後、七世紀後半に古墳が築造されなくなるまでの時代を古墳時代と呼びならわしている。

古墳時代は、その発展段階を墳形・埋葬施設・副葬品などの変化を参考にして、前・後二期に区分する場合と、前・中・後の三期に大別して考える場合があるが、ここでは、三期に大別し、前期は三世紀後葉から四世紀代を、中期はほぼ五世紀代を、そして後期は六世紀以降の年代を示すものとして記述を進めたい。

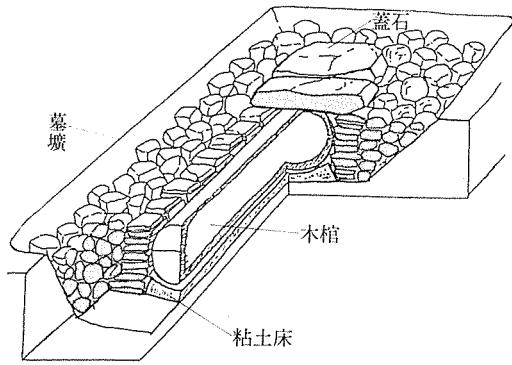


図 138 堅穴式石室模式図

かれた前方後円墳が多く、少数ながら前方後方墳や円墳・方墳も存在する。

古式の古墳が墳丘を三段に築成することの背景には、中国古代の祭祀における祭天の場としての円丘が三段に築かれていたことと深くかかわっているのではないかと推定されている。

埋葬施設は偏平な板石を積み上げて築いた長さ五メートル以上もある長大な堅穴式石室が多く、石室の底部に粘土で棺台をつくり、その上に割竹形の木棺を安置し、内部に遺体とともに銅鏡、勾玉・管玉・小玉・石製腕飾類などの宝器的色彩の強い遺物、鉄製武器・農具など多量の鉄製遺物を副葬している。

このような古墳の出現は、かつての邪馬台国の女王卑弥呼が「鬼道に事え、能く衆を惑わす」といわれたように、宗教的色彩の強い司祭者の首長であったのに代って、弥生時代以来の農耕社会の発展を背景として経済的かつ武力的な力をもった豪族のあらわれたことを示している。しかし、副葬品をみるかぎり、まだ十分に司祭者の性格を脱却していない部分のあることも認めざるをえない。

副葬品のうち、最も注目すべきものは銅鏡である。銅鏡は、弥生時代には北九州の甕棺に副葬される例は多いが、墳丘墓に副葬されている例はほとんどなく、古墳の出現とともに大量副葬がはじまる。しかも、前

期前葉の古墳においては中国製の銅鏡ばかりが副葬され、日本製の三角縁神獸鏡が副葬品に加わるのは、やや時期が下った前期後半からだといわれている。

また、前方後円墳における長軸の方位がどのような方向を示すかにかかわらず、埋葬施設としての竪穴式石室は概して南北方向に築かれているものが多く、しかも竪穴式石室の幅は南端に比して北端のそれが幅広いことから考えて、頭部を北側にむけて埋葬された例が多いのではないかとされている。こうした北優位の埋葬のちに畿内と呼ばれたような地方を中心とした地域に認められ、墳丘を三段に築成しようとする思想と同様に、わが国における古墳の成立に際して中国思想の強い影響があったであろうことを感じさせる。

六甲山地南麓の 神戸市域およびその周辺で、最古の古墳がどの地域にはじめて成立し、その内容はどのへボン塚古墳 ようなものであったかは、まだ十分に明らかにされていない。

西摂平野の西端部に続く六甲山地南麓の平野部周辺には、比較的多くの前期古墳が知られているが、いずれも土木工事に伴って発見され、しかも発見時が戦前のものばかりで、その内容は不明な点が多い。

六甲山地南麓では、生田川以東の前期古墳は必ずしも高所に位置せず、むしろ集落と隣接するような平野部周辺に位置する例が多い。そして生田川以西の前期古墳は、丘陵や尾根上の高所に築かれている例が多い。芦屋川以西住吉川までの地域で、最も古い様相を示す古墳は東灘区岡本のへボン塚古墳であろう。

阪急電鉄岡本駅の南約一五〇メートル、天上川の東岸に接する標高約二五メートル付近に前方部を西北西へ向けて築かれた前方後円墳で、墳丘は古く民家の庭園の一部にとり入れられたため、その全貌は不明な点が多いが、全長約六四メートル、後円部径約三一メートル、二段に築かれていたといわれており、現在も墳



写真 109 三角縁神獸鏡
(東灘区へボソ塚古墳)

丘南側の輪郭を残している。墳丘の斜面には葺石が認められたが、埴輪はなかったらしい。

埋葬施設は割石積の竪穴式石室であつたらしく、明治二十八年(一八九五)に銅鏡六面、石釧二個、勾玉二個、管玉一三個、小玉一二一個、瓌玉一個、土器などが発見されており、現在東京国立博物館に所蔵されている。

発見された鏡は、夔鳳鏡一面、斜縁吾作銘三神二獸鏡一面、画文帯環状乳神獸鏡一面、獸形鏡一面など中国の漢代から魏・晋代に铸造されたもののほか、三角縁神獸鏡二面が含まれている。三角縁神獸鏡のうち天・王・日・月銘唐草文帯三神二獸鏡は奈良県佐味田宝塚古墳鏡、京都府長法寺南原古墳鏡(二面)、京都府西車塚鏡、大阪府石切神社藏鏡、岐阜県長塚古墳鏡、岐阜県円満寺古墳鏡、愛知県東之宮古墳鏡と同じ鑄型または原型で鑄造されたもの(同範鏡)であり、唐草文帯三神二獸鏡も加古川市東車塚から同範鏡が発見されている。おそらく前期中葉に属する古墳であろう。

東求女塚 住吉川以西石屋川までの地域で古い様相を示す古墳は、東灘区住吉町の東求女塚古墳である。

古墳 全長八〇メートル以上、前方部幅三六メートル以上と推定される西向の前方後円墳で、前方部正面(西側)には幅約一〇メートルの周濠状の溝があり、北側にも明らかに周濠状のくぼみが認められる。しかし、標高約六メートルの縄文海進期の汀線付近に位置しているため、南側にまで周濠がめぐっていたかど

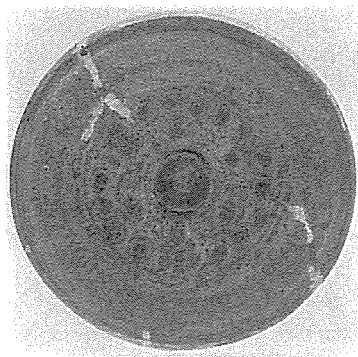


写真 110 三角縁神獸鏡
(東灘区東求女塚古墳)

うかは明らかでない。

前方部については比較的広範囲の調査が行われたが葺石は認められたものの埴輪は一片も発見されていない。

埋葬施設は、前方部および後円部に存したといわれており、明治九年（一八七六）ごろ、前方部から木棺材とともに内行花文鏡一面、三角縁神獸鏡四面、画文帯神獸鏡一面、車輪石二個、刀剣などが発見され、現在東京国立博物館に所蔵されている。また、明治三十三年（一九〇〇）には後円部の竪穴式石室から内行花文鏡および獸形鏡と推定される銅鏡が出土しており、前方部・後円部ともに出土鏡の多くが中国製であるらしい。おそらく前後半に属する古墳であろう。

発見された三角縁神獸鏡のうち一面は、天王日月・唐草文帯四神四獸鏡で京都府寺戸大塚古墳鏡と同范鏡であることが知られており、他の天・王・日・月・獸文帯三神三獸鏡は福岡県原口古墳鏡、同県祇園山古墳鏡、奈良県桜井茶臼山古墳鏡、三重県桑名古墳鏡と同范鏡であることが知られている。

ヘボソ塚古墳や東求女塚古墳から発見された三角縁神獸鏡と呼ばれている鏡は、鏡背の文様に神仙思想にもとづく神像や獸形を配し、周縁部の断面が鋭い三角形を呈する鏡で、直径二十数センチもある大形鏡が多い。

このような中国製と推定される三角縁神獸鏡は、これまでに日



写真 111 東求女塚古墳前方部正面

本国内で三〇〇面近く発見されているが、そのなかには景初三年（三三九）の紀年をもつ島根県原神社古墳鏡や、正始元年（二四〇）銘をもつ群馬県柴崎古墳鏡、兵庫県森尾古墳鏡、山口県竹島古墳鏡などが含まれており、景初三年に魏の都・洛陽に使者を送って朝貢した邪馬台国の女王卑弥呼が下賜された「銅鏡百面」がこのなかに含まれているのではないかとされている。

しかし、中国本土では、このような三角縁神獸鏡は一面も発見されておらず、しかも文様の構成が中国北方の魏よりもむしろ南方の呉の勢力範囲内で盛行したものに近いところから、三角縁神獸鏡の魏鏡説に否定的な研究者も少なくない。

いずれにせよ、こうした三角縁神獸鏡のなかには、同じ鋳型または原型から製作されたと推定されるいわゆる同范鏡が多数含まれており、それらの分布を見ると、のちに畿内と呼ばれるような地域に分布の中心があり、そこから西方あるいは東方へ配付されたかに見える。卑弥呼が、各地の豪族に配付し、地方豪族の権威を保証し、同盟関係を結んだ証としたのではなからうか。

処女塚古墳

石屋川以西都賀川までの地域では、石屋川の形成する扇状地の末端で、標高約四メートルの縄文海進期の汀線付近に位置する東灘区御影塚町の処女塚古墳が、これまで知られている墳丘の形態、出土遺物などからみて、最も古式の古墳である。

全長約七〇メートル、前方部幅約三二メートル、高さ約四メートル、後方部幅約三九メートル、高さ約七メートル、後方部は三段築成、前方部は二段築成で、前方部と後方部の高さの差が大きい南向きの前方後方墳である。

墳丘斜面には葺石を葺いており、前方部の墳頂にも石を敷きつめていたらしい。埴輪列は認められていないが壺形土器が数個体分発見されている。東西くびれ部から出土している壺形土器は二重口縁で竹管による円形文を施したものや、二重口縁で底部に穿孔したものなどがあり、くびれ部テラス面で祭祀が行われたらしいことを示している。また、後方部頂上からは鼓形器台片が発見されており、出土する土器の多くが、日本海沿岸西部地域でみられるものに近い器形や文様をもっている。処女塚古墳の築造年代は四世紀中葉ではないかと推定される。後方部中央には長さ約一三メートル、幅約二・五メートルの石組遺構があり、埋葬施設は木槨^{もくかく}ではないかと推定される。この埋葬施設は、主軸に平行して南北に設けられているらしいが、くわしいことはわかっていない。また、東側くびれ部のテラス面から箱式石棺一基が発見され、蓋石直上から滑石製勾玉一個が出土しているが、この石棺は墳丘築造時ではなくのちに築かれたものようである。

西求女塚 都賀川以西旧生田川までの地域では、四世紀代に築造されたと推定される古墳は西灘の西求女

古墳

塚古墳である。



写真 112 獸帶鏡（灘区西求女塚古墳）

の三方は現在道路になっていて、周濠がめぐっていたかどうかは不明である。なお、葺石は存在するが、埴輪は確認されていない。

西求女塚古墳および西求女塚古墳は、いずれも埋葬施設が未調査で副葬品が不明であるが、墳丘から発見された土器をみるかぎり、西求女塚古墳が四世紀中葉、西求女塚古墳が四世紀後葉に築造されたと推定され、東方のヘボン塚古墳が四世紀前半、東求女塚古墳が四世紀中・後葉に築造されたと推定されるのに比して、やや遅れて築造されたことが知られる。想像をたくましくすれば、西求女塚古墳は、仿製の三角縁神獸鏡を含む副葬品が出現する段階に築造された古墳であろうと推定される。

阪神電鉄西灘駅の南東約一五〇メートルの、縄文海進期の汀線崖より上位の標高約七・五メートルあたりに位置する東向の前方後円墳で、全長約一一〇メートル、後円部径約七〇メートルの大形の古墳であることが知られているが、埴輪や葺石の有無、埋葬施設の状況、副葬品の内容などについてはまったく知られていなかった。昭和六十年（一九八五）の墳丘の残存状況を確かめる調査で、後円部には南北に主軸をもつ割石積の堅穴式石室が築かれているらしいことがわかった。後円部頂上付近からは獸帶鏡の破片や小形丸底壺、鼓形器台、二重口縁壺などの土師器が発見されており、土器の形態などからみて四世紀後葉に築造された古墳ではないかと推定される。なお、古墳の周囲は南側が崖面にあたり相当低くなっているが、他

なお、この西求女塚古墳（味泥の大塚山あるいは求塚と称す）と処女塚古墳（東明の処女塚）および東求女塚古墳（呉田の求女塚あるいは東乙女塚）は、海岸線に近い位置に東西に一・六〜二キロメートルの間隔をおいて並んでいるところから、古代以来、人々の関心を呼び、ひとりのおとめを恋する二人の青年の悲恋物語が生まれた。『万葉集』や『大和物語』、のちには謡曲の『求女塚』などによって人々によく知られている。

夢野丸山

旧生田川以西旧湊川までの地域では、これまでに四世紀代の古墳は発見されていない。

古墳

この地域と深くかわるのではないかと推定されるのは、地形的には旧湊川以西に位置する兵庫区夢野丸山古墳である。

鳥原貯水池の東端近くの南側で、西から東へのびた標高約一〇〇メートル、比高六〇メートルばかりの丘陵上に位置する古墳で、大正十二年（一九二三）に偏平な板石積の竪穴式石室が発見され、副葬品の配列状況などが比較的よく知られている。

墳丘は、調査当時、前方後円墳の可能性を考えながらも径約一八メートルの円墳として報告されているが、残された墳丘見取り図や昭和初年ごろの地形図から推測して前方部を東へ向けた前方後円墳であることは、ほぼ間違いないところであろう。

円丘部は二段の葺石が認められているが、下段の直径は約三〇メートル、中段の直径は約一八メートル、墳頂部は径約一二メートルという復元値を得ることができる。なお、高さは上・下段ともに約三・六メートルである。墳丘の全長については、いまのところ復元の根拠はないが、昭和初年の地形図によると一〇〇メートルの等高線が前方後円状の形状を示して全長五〇〜六〇メートル程度の前方後円墳であったのでは

ないかと推定できる。副葬品としては、重列式神獸鏡をはじめ銅鏃・鉄鏃・鉄刀・鉄劍・鉄鎌・鉄斧・鉄鉾・土師器などが発見されている。

会下山二 旧湊川と旧苅藻川の間に広がる平野部を見下ろす位置にある会下山二本松古墳は、標高八〇メートル、比高六〇メートルばかりの丘陵上に、前方部を南南西に向けて築かれた前方後円墳である。

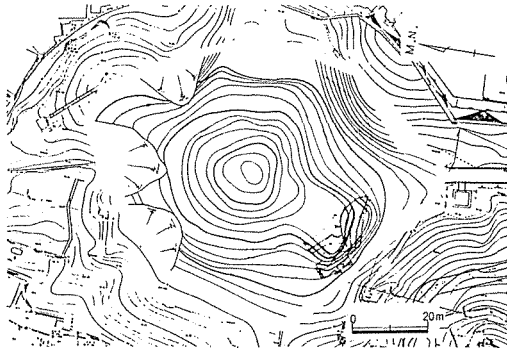


図 139 会下山二本松古墳墳丘実測図

昭和二年（一九二七）に行われた配水池建設工事に伴う調査では直径約二〇メートルの円墳であろうと推定されていたが、昭和五十九年（一九八四）の配水池改築工事に伴う調査で、円丘部の南側に盛土によって前方部が付設されており、しかも二段の葺石を伴っていたことが判明した。また、昭和二年（一九二七）に製作された測量図によると、南北にのびた丘陵上に前方部をやや西にふった前方後円状の高まりが記録されている。

この地形図と昭和五十九年（一九八四）の調査で検出された葺石とを合わせ推測すると、全長約五五メートル、後円部径約三五メートル、前方部幅約二〇メートルの前方後円墳を復元することができる。また、前方部西側下段の葺石の配列をみると、前方部の先端が外方にひらいているようにみえる。なお、前方部東側で埴輪らしき小片が発見されているが磨滅がはげしくはっきりしない。

いたらしいことが推定できる。

得能山古墳

旧荻藻川以西妙法寺川までの地域では、これまでに前期の古墳は発見されていない。妙法寺川西岸の板宿町三丁目あたりの丘陵上で、大正十三年（一九二四）に発見された得能山

古墳は、発見当時の報告によると、円墳であったといわれているが、その規模・形状ともに不明である。しかし、この古墳もさきにもふれた夢野丸山古墳や会下山二本松古墳と同様に前方後円墳であった可能性は高い。

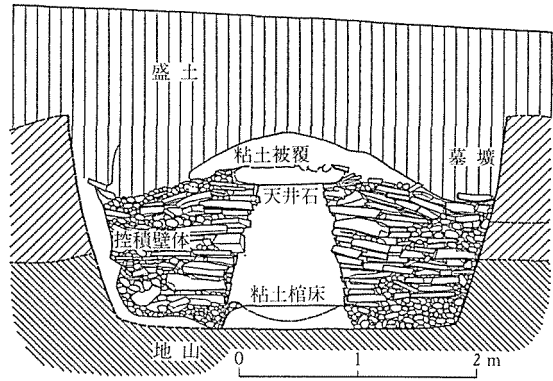


図 140 会下山二本松古墳堅穴式石室断面見取図

埋葬施設および副葬品についても、昭和二年（一九二七）の調査時の記録によってほぼその全容を知ることができる。

埋葬施設は扁平な板石を小口積みにした堅穴式石室で、長軸を南北におき、内法で全長約五・八メートル、北端の幅約一・一メートル、南端の幅約〇・九五メートル、高さは約一メートル、一枚の天井石を架構していた。

副葬品は内行花文鏡ではないかと推定される径一五・五センチメートルの銅鏡一面、琴柱形石製品一個、鉄刀、鉄剣、刀子、鉄斧（袋穂のものおよび板状のもの）、鉄鏃のほか、鉄鎌や鉞、鉄錐なども存したらしい。こうした遺物は、いずれも石室の北半部から検出されており、石室の幅も南端に比して北端のそれが広いことと考えあわせて、この古墳の遺体は頭部を北に向けて埋置されて



写真 113 内行花文鏡
(須磨区得能山古墳)

得能山古墳は、標高約五〇メートル、南側の水田地帯との比高約三五メートルの丘陵上に位置し、円丘部中央に竪穴式石室が主軸を南北方向にして築かれていた。石室内部は北端の幅が約九一センチメートル、南へゆくほど狭くなり、全長は三メートル以上、高さ約一・二メートル程度であったと推定されている。石室の床面はU字の粘土床で木棺の一部も残存していたという。

前後の女性の頭蓋骨があり、その両側に画文帯神獸鏡および内行花文鏡各一面が置かれていたという。

夢野丸山、会下山二本松、得能山の各古墳はいずれも学術的な調査で発見されたものではないが、これまでに知られているかぎり埋葬施設は竪穴式石室で中国鏡を副葬していることが知られているが、三角縁神獸鏡を欠いている。このことは六甲山地南麓東半のヘボン塚や東求女塚に比して、西半の各古墳の被葬者と畿内政権との関連性にやや相違するものがあることを示しているのであろうか。

山田川流域

の前期古墳

六甲山地南麓平野西端の須磨から東播平野の東端明石川流域までの中間地帯には、塩屋谷川・福田川・山田川などの、比較的規模の小さい河川が南流しており、それぞれの流域に大小の遺跡を残しているが、特に弥生・古墳時代には山田川流域で多くの遺跡が知られている。

旧石器時代以来の遺跡として知られる垂水区西舞子の大歳山遺跡の場合は、明石原人発見地の再発掘を試

第一節 前方後円墳の成立と発展

みた春成秀爾が、高校生のころ古墳時代前期後半の遺物を採集して、この地に前期古墳が存したことを明らかにしたものである。

大蔵山は東の毘沙門山から西へ半島状に突出した標高約三〇メートルの丘陵で、現在は東側を道路によって切断されており、一見独立丘陵状にみえる。

前期の遺物が発見された地点は、現在の墓地と遺跡あとの公園のちょうど中間あたりで、すでに削られてしまった標高三三・二メートルの山頂部からやや東へ下った標高二八メートルあたりであったという。墳丘その他外表の施設については全く知られていない。

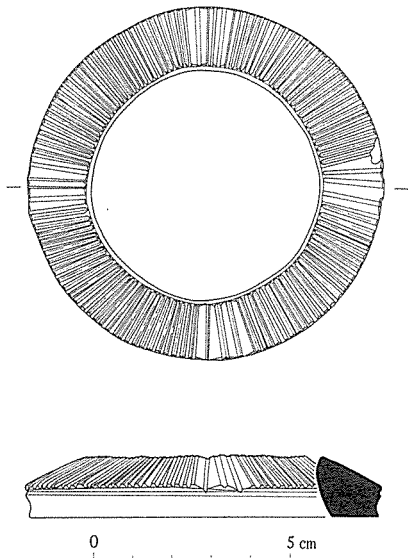


図 141 石鉏実測図（垂水区大蔵山古墳）

発見された遺物は小形の銅鏡、石鉏と勾玉二個・管玉一九個・小玉四二個などの装身具であり、北西から南西にかけて長さ約一・六メートル、最大幅約〇・五メートルの範囲の粘土層中から出土している。粘土層の低部は西北側が高く、東南方向へむかって傾斜しており、頭部を西北側に向けていたのではないかと推定される。出土遺物のうち銅鏡は、復元直径六・三センチメートルの素文鏡で、石鉏は薄緑色と白色の互層が木目状にみえる軟質の凝灰質頁岩製で比較的古い様相を示している。

埋葬施設は、割竹形木棺を粘土で覆ったいわゆる粘土槨と呼ばれる形式のもので、石釧や銅鏡の形式からみて、おそらく四世紀末に近い時期の古墳であろう。

明石川流域

明石川流域で最も古い古墳は、六甲山地南麓の平野部周辺でみられるような、畿内の連合政

の前期方墳

権の一翼を担っていると推定できるような、本格的な埋葬施設や副葬品をもった例はなく、

むしろ弥生墳・丘墓に近い方形の墳墓が多い。しかも、いくつかの古墳が群集している例が多いことも弥生墳・丘墓との関連を推定させる材料となる。

天王山第

明石川流域で最古の古墳は、支流伊川流域の天王山第

4号墳

4、第5両古墳であろう。

昭和五十五年（一九八〇）に破壊に先立って調査された天王山第4号墳は、標高約七八メートル、南東側にひろがる平野部との比高約五〇メートルの丘陵上にある、長辺約一九メートル、短辺約一六メートルの長方形の古墳である。墳丘の高さは現高約二・七メートル、復元高約三・三メートルで、下方の約一メートルは地山を削って整形し、その上部に盛土を施している。

墳頂平坦面は南北約八メートル、東西約五メートルで、その中央に長辺約七メートル、短辺約三メートルの土坑を掘り、二つの割竹形木棺が取められていた。



写真 114 天王山第4号墳全景

りに齒が一体分と管玉五個、ガラス玉一五個があり、その東側に銅鏡一面がおかれており、その北側に槍鉋二点と鍬先一点が副葬されていた。おそらく頭部を北側にむけて埋葬されていたと推定される。銅鏡は向きあった一对の鳥文が四組鑄出された直径約九・六センチメートルの小形八禽鏡で、鈕の片側が磨耗しており、シャーマンが頸につり下げたような懸垂鏡として使われていたことを示している。三角縁神獸鏡のような大形鏡が宝器的性格が強いのに対し、このような小形鏡は正装した首長の装身具の一つとして実用的に使われた場合のあったことを示している。



写真 115 八 禽 鏡
(西区天王山第4号墳)

東側の1号棺は長さ約四・五メートル、南端幅約六〇センチメートル、北端幅約五三センチメートルで、棺の中央よりやや南寄りに管玉二個、ガラス玉五個の一群があり、南端近くに鉄刀一点、槍鉋^{やうかん}一点、鍬先一点がおかれ、北端より南へ一・三メートルのあたりに鉄斧一点と刀子一点が副葬されていた。おそらく頭部を南側にむけて埋葬されていたのであろう。

西側の2号棺は長さ約五・四メートル、北端幅約五五センチメートル、南端幅約四五センチメートルで、棺の中央よりやや北寄

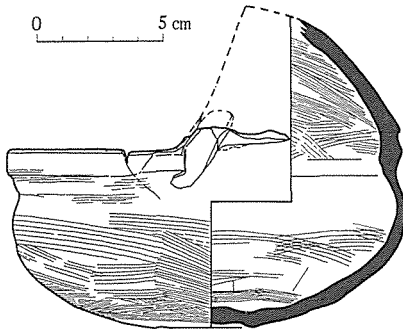


図 142 手楯形土器実測図
(西区天王山第4号墳)

二棺の埋葬順序は、1号棺の掘形が2号棺の掘形を切っているので、2号棺のほうが古いことが知られる。また、墳頂平坦面の東北隅部に、複合口縁の壺に鉢をかぶせた土器棺が埋められており、さらに土器棺から東約二メートルの墳丘斜面に直径約九〇センチメートルの土坑があり、その内部に手焙形土器がおかれていた。

手焙形土器は、弥生時代後期から古墳時代前期へかけてのところに多い特殊な土器であるが、これまでに知られている例は、東は関東地方から西は北九州まで約一三〇カ所の遺跡で出土しているが、古墳からの出土例は少ない。

そのほか、墳丘の斜面や裾部からも複合口縁の土器片が出土しており、これらの土器によって推定される年代は、おそらく四世紀前半であり、この古墳の築造年代を示している。

天王山第 伊川の流域では、天王山第4号墳の南西約一二〇メートルの天王山山頂にも、東西約二〇メー

5号墳 トル、南北約一八メートル、高さ約二メートルの方墳があり、四世紀代に、天王山第4号墳と

よく似た内容をもつ古墳がいくつか存することが知られている。

天王山山頂に古墳が存することは古くから知られており、この古墳が先にふれた天王山第4号墳や、谷をへだてた西側の丘陵上の瓢塚古墳ひょうづかよりも眺望のすぐれた位置を占めており、この付近では最古の墳丘墓が存するのではないかと推定されていたが、これまで全く古墳の年代を示すような資料は発見されていなかった。

ところが昭和六十一年（一九八六）になって、この古墳は破壊を目的とした心ない人たちによって乱掘され、遺構・遺物ともにほとんどが失われてしまった。その後の調査で、墳丘中央に東西に長い木棺が三棺並列し、

第一節 前方後円墳の成立と発展

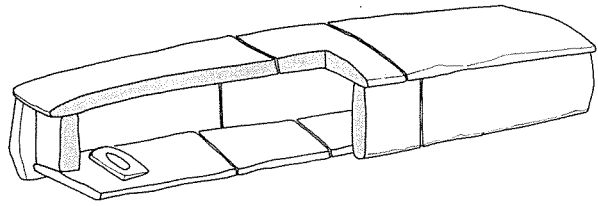


図 143 箱式石棺模式図（西区天王山5号墳）

その東側に、南北に長く大形の組合せ式石棺がおかれていたことが明らかになったのは不幸中の幸であった。

三棺並んでいる棺のうち中央の棺は長さ約五・二メートル、幅約六〇センチメートルの割竹形木棺で、鉄剣一点と土師器片が出土している。

南側の棺は、長さ約四・二メートル、幅約五〇センチメートルの割竹形木棺で、遺物は発見されていない。

北側の棺も長さ約四・二メートル、幅約五〇センチメートルで割竹形の木棺ではないかと推定されるが、箱形であった可能性もある。

東側の棺は、墓壇内に残されていた痕跡から凝灰質砂岩製の、内法が長さ約二・三メートル、幅約四五センチメートルの組合せ式石棺で、棺の内面全体と棺内におかれた石枕には赤色顔料が塗られていた。

この古墳については破壊されつくしているため築造年代を推定する資料に乏しいが、天王山第4号墳に続く時期に築造されたのではなからうか。

西神ニュータウン内の前期方墳

天王山第4、第5号墳と同じような方墳は、明石川中流の平野町繁田や堅田にもいくつか認められる。

西神ニュータウンの建設に伴って発見された西神第44・45号遺跡の両墳も、丘陵上に築かれた方墳で、埋葬施設は割竹形木棺であり、鉄剣を副葬し、第44号遺跡墳では複合口縁の壺が発見されており、四世紀中葉

の墳墓であることが知られる。

また、堅田1号墳は、標高約七六メートル、付近の水田との比高約五〇メートルの尾根上に位置し、東西約一四メートル、南北約一八メートル、高さ約二・四メートル（盛土は約一メートル）の方墳で、墳丘の長軸に平行して三つの埋葬施設が設けられていた。

墳丘の最も北西側に設けられた第2号棺は全長約四・九メートル、幅約六〇センチメートルの割竹形木棺で、棺の中央よりやや東北側に径約八・四センチメートルの小形鏡（鏡式不明）がおかれ、中央より西北側に鉄剣、槍鉾などが副葬されていた。

中央の第1号棺は長さ約五・五メートル、幅約五五センチメートルの割竹形木棺で、棺の東北寄りに鉄剣がおかれていた。

埋葬施設としては、さらに東北端に、長さ約一・五メートル、幅約六五センチメートルの箱形の木棺が埋納されており、第1、第2号棺の周囲には礫を充填した暗渠の排水施設が設けられていた。

明石川流域最古

明石川流域では、こうした天王山第4号墳類似の堅穴式石室を欠いた古墳は、前期後葉の前方後円墳から中期はじめへかけても存続するが、前期後葉に、長大な堅穴式石室を埋葬施設とする

と推定される前方後円墳が出現する。

天王山の西約五〇〇メートルの、標高約六〇メートルの丘陵上に前方部を西に向けて位置する瓢塚古墳（薬師山古墳あるいは妻塚古墳ともいう）は、全長約五七メートル、前方部幅約一六メートル、高さ約二・五メートル、後円部径約三一メートル、高さ約四・五メートルの前方後円墳である。後円部裾部よりも前方部先端

第一節 前方後円墳の成立と発展

外反するものと、あまりひらかないものとの口縁部を合わせた二本の円筒埴輪を連結させた棺であり、両端を板状の割石でふさいでいた。この棺に使用されている石材は、通常堅穴式石室に使用されることの多いものであり、未調査の後円部頂上に築かれているはずの埋葬施設が堅穴式

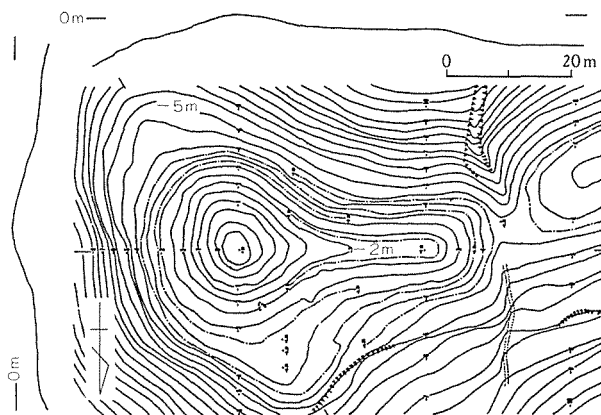


図 144 瓢塚古墳平面図

裾部のほうが低いので、前方部と後円部の墳頂部の高低差は大きく約二・五メートルを測り、前方部墳頂は細く長い。墳丘斜面を飾る葺石は認められていないが、中段に埴輪列がめぐっており、前方部は二段、後円部は三段築成であった可能性が高い。墳丘の周辺部に多くの円筒埴輪を棺に利用したいわゆる円筒棺が存在することは直良信夫によって報告されているが、昭和六十二年（一九八七）の調査でもくびれ部北側や後円部南側で合口の円筒棺が発見されている。

くびれ部北側で発見された円筒棺は、口縁部がやや



写真 116 円筒棺（西区瓢塚古墳）

石室であった可能性を示している。

瓢塚古墳から発見された円筒埴輪は、長径約四〇センチメートル、短径約三〇センチメートルの楕円形の円筒埴輪を含む最古形式に属するもので、この古墳の築造年代が前期後葉であることを示している。

瓢塚古墳の副葬品については全く知られていないが、墳丘の形態や埴輪の存在からみて、明石川流域の首長層が、この時期に畿内の政治的勢力のもとに加わったことは確かであろう。

直良信夫の報告によると、瓢塚古墳の西側にも、より規模の大きな東向の前方後円墳が存在し、この方が夫塚と呼ばれていたのに対し、瓢塚古墳の方は別名妻塚と呼ばれていたという。夫塚古墳についてはその築造年代を示す資料に欠けている。

武庫川中流域 武庫川中流域の北区東半部や三田市域では、前期の前方後円墳、竪穴式石室、中国鏡の大量埋納などは認められず、畿内中枢との直接的関連の薄さを思わせる。

の前期古墳 長尾川流域の定塚古墳群は五基の墳丘が尾根上に並んでおり、調査された第1・第2号墳は、いずれも埋葬施設が箱形の木棺で、出土した土器からみて、弥生時代末期から古墳時代はじめにかけての墳墓ではないかと推定される。

また、北神ニュータウン内第9号地点の第1号墳は東西約一四メートル、南北約一一メートル、高さ約二・五メートルの方墳で、東西方向に長さ約三・六メートル、幅約七〇センチメートルの割竹形木棺が埋納されており、副葬品は認められなかった。なお、墳丘の南斜面から土師器が出土していて、四世紀末から五世紀へかけての古墳であることは確実である。

第一節 前方後円墳の成立と発展

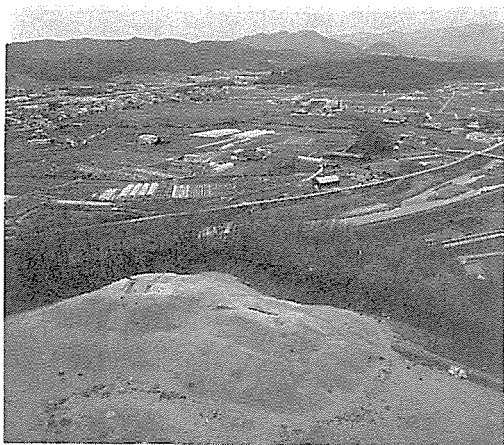


写真 117 北神第9号遺跡第1号墳(右側)と第2号墳

三田市域では、昭和四十九年(一九七四)に調査された三田市貴志の標高約一七二メートル、水田面との比高約二二メートルの丘陵先端に位置する奈良山1号墳が最も古い古墳である。墳丘は破壊が著しいが二段に築かれた直径二二〇―三メートルの円墳で、上・下二段の列石がめぐっており、残存する墳丘は一メートルあまりにすぎないが、本来は約二メートルの墳丘であったと推定される。

埋葬施設は二基あり、墳丘中央の第1埋葬施設は東西に長い土壇のなかにこぶし大から人頭大の河原石を敷き、その上に木棺を安置したものらしい。木棺の形態は割竹形木棺あるいは箱形木棺であるが、後者の可能性が高い。

墳丘の東半は北摂ニュータウンの建設に伴って破壊されており、埋葬施設の東半も欠失しているが、土壇の長さ約三メートル、幅約二・五メートル、礫床の長さ約一・六メートル、幅約一・六メートルが残っている。おそらく四メートル近い木棺ではなかったかと推定される。副葬品は鉄鏃二本と土師器の小形埴^かで、埋葬施設の上部に置かれていたと推定される複合口縁の壺形土器も発見されている。

なお、第1埋葬施設の北西一・六メートルの位置にも河原石積の竪穴式石室状の遺構が発見されているが副葬品はない。この古墳の築造年代は、出土した土師器片から推定して前

期前半に属するものであることは確実である。

2 巨大古墳の時代

巨大古墳 四世紀の中葉以降五世紀にかけて、各地の前方後円墳の規模は、最大限に巨大化する。

の出現

大和盆地では、四世紀前葉に築造された箸墓古墳（桜井市、全長約二七八メートル）、中葉の西殿塚古墳（全長約二一九メートル）、後葉の伝景行天皇陵古墳（天理市洪山向山、全長約三〇〇メートル）に代表されるように、いち早く古墳が巨大化するが、河内平野では、四世紀後葉に古市古墳群の津堂城山古墳（藤井寺市、全長約二〇八メートル）、百舌鳥古墳群の乳の岡古墳（堺市、全長約一五五メートル）が出現し、以後五世紀中葉までに古市古墳群の伝応神天皇陵古墳（羽曳野市、全長約四一五メートル）、百舌鳥古墳群の伝仁徳天皇陵古墳（堺市、全長約四八六メートル）のように、日本で最も巨大な古墳が相次いで出現する。

こうした巨大古墳を築造しうる経済力と土木技術を、畿内の大王ばかりでなく、西日本各地の首長層が持ちえたのがこの時期である。

六甲山地南麓の 神戸市域においては、六甲山地南麓の旧生田川以東の灘区西求女塚古墳（全長約二一〇メ

大形前方後円墳 ートル）がいち早く大形化し、旧生田川以西では旧荻藻川河口東岸の長田区念仏山古墳

（全長約一九〇メートル）、福田川と山田川の中間に位置する垂水区五色塚古墳（全長約一九四メートル）、明石川流域の西区王塚古墳（全長約七〇メートル）などがその代表的な例である。こうした前方後円墳は、当時の可耕

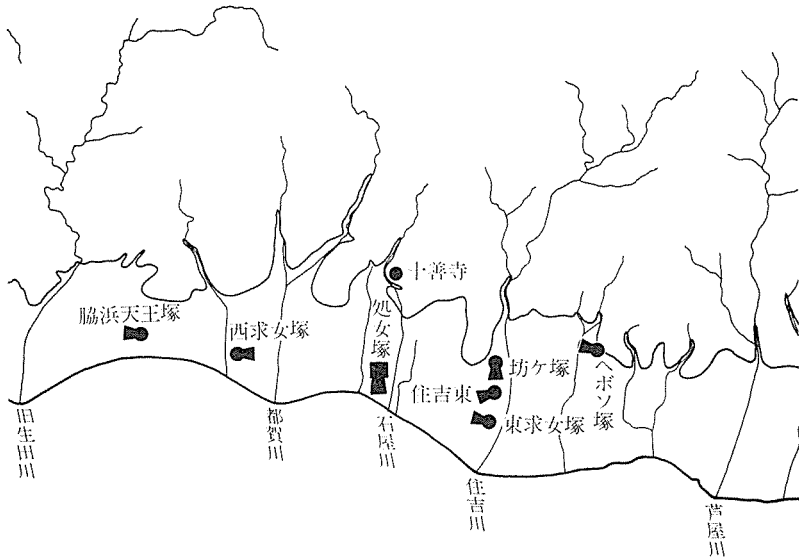
地に近い台地上や砂堆上、あるいは縄文海進期の汀線崖の上部に築かれている。

明治の初年以來、急速に市街化が進行した東灘から須磨にいたる地域では、すっかり姿を消してしまった古墳も少なくないが、昭和二十六年（一九五二）七月の『神戸史談』復興第四号（通巻二〇二号）に「旧神戸市の古墳所在地覚書」と題して、福原会下山人の覚書が掲載されているほか、江戸時代の『撰津志』、『撰津名所図会』あるいは明治時代の『神戸覽古』などの地誌や絵図、さらに明治十八年（一八八五）以降の二万分の一の地形図をはじめとする参謀本部による近代的な測量図などによって、前期・中期の大形古墳のいくつかがうかがいあがってくる。

旧生田川以東について検討すると、東の芦屋川から住吉川にいたる地域では、大形の前方後円墳は未発見である。

石屋川以西都賀川にいたる地域では、かつて処女塚古墳以外にも付近にいくつかの古墳が存在した可能性がある。処女塚古墳の東約五〇メートルの八幡神社社の周囲は、付近の地表より約一メートル高く、処女塚古墳と同じような状況を呈していたことは『撰津名所図会』によっても知られ、同図会によればさらに東側にも同様の高まりがみえ、その上に人家がみえる。

この地域では、大形古墳である可能性をもつ高まりが、阪神電鉄新在家駅の西約一〇〇メートルの地点にも認められる。この地には稲荷大明神が祭られており、南北約三六メートル、東西約一八メートル、南半部は高さ約二・五メートル、北半は高さ約四メートルで、北半の中央部がさらに約一メートル高くなっており、その部分に社殿が建っている。この形はあたかも前方後方墳の周囲を整形し石垣で囲ったようにみえる。昭



分布図（六甲山地南麓）

和初年の一万分の一の地形図によると、この地点はすでに現在と変らない形をしており、さらに西約一〇〇メートルの地点に東西に長い盛土状の高まりが記されている。この二地点についてはこれまでに古墳であることを実証する遺物が発見された記録はないが、おそらく古墳であったことは確かであろう。

この地域では、もう一カ所、阪急電鉄六甲駅の南、八幡神社の西側にも前方後円墳が存在したと伝えられているがくわしい記録を欠いている。

以上のような記録にみえる前方後円墳は、のちに述べる脇浜天王塚古墳や念仏山古墳と、同時期というよりも、むしろ小形化する時期の古墳と推定すべきかもしれない。

脇浜天王塚古墳 都賀川以西旧生田川にいたる地域では、脇浜の天王塚古墳およ

第一節 前方後円墳の成立と発展

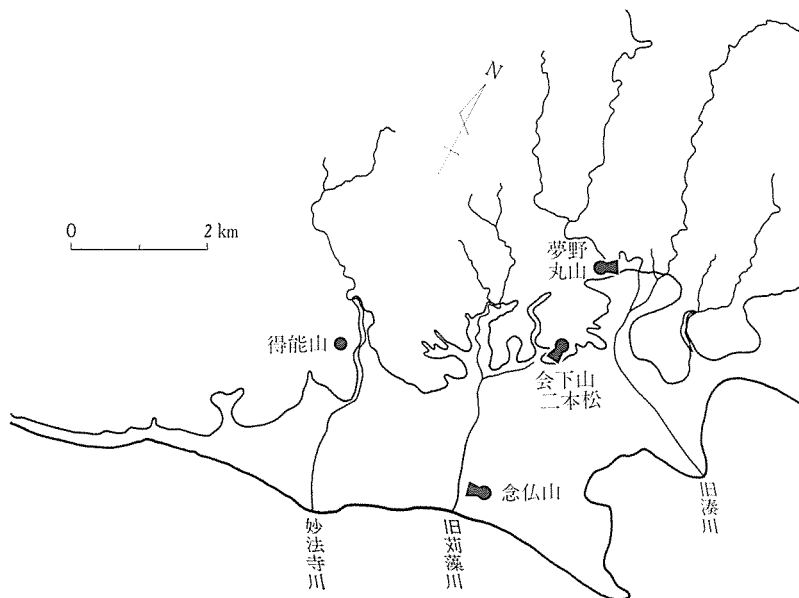


図 145 前・中期古墳

び乙女塚古墳が古くから知られており、『撰津名所図会』、『神戸覽古』などにその姿をどめているほか、明治・大正期の神戸市全図にはその正確な位置が記録されている。

悲恋物語を生んだ処女塚古墳と東西両求女塚古墳についてはすでに述べたが、実はもう一カ所乙女塚古墳と呼ばれる古墳が存在しているわけである。

明治から大正へかけての神戸市全図には必ず乙女塚の記載があり、大正末年から昭和のはじめまで盛土の一部が残っており、その上に樹木が繁っていたといわれている。ただ寛政八年（一七九六）刊の『撰津名所図会』には「天王塚、畔塚、和理塚、共に脇浜にあり」という記載があり、乙女塚の名がみえないので、この脇浜の古墳の一基がいつごろから乙女塚と呼ばれるようになったのかは定かでは

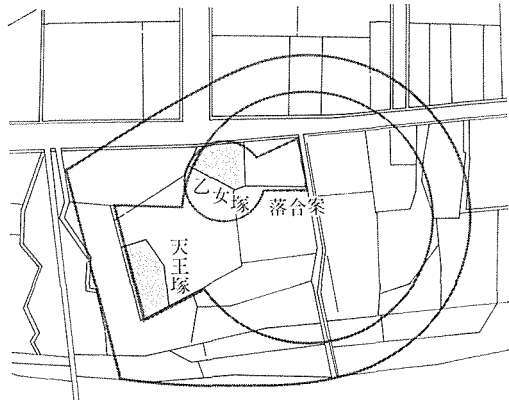


図 146 脇浜天王塚古墳平面復元図

シキモノ、多数散在セルモノアルニテコレヲ知ルベシ」と記されており、葺石が顕著であったことが知られる。この乙女塚古墳を、東向の前方後円墳として復元したのは落合重信「脇浜の乙女塚」(『埋もれた神戸の歴史』昭和五十二年)である。落合重信によると、全長六〇メートルを越える前方後円墳ということになるが、この復元案によれば、先の「南方ニ空地ヲ存シテ稍平地ヨリ高キモノ」が存在するという渡部多仲の記述が十分に生かされていない。

ここでは、その代案として、乙女塚はさらに南側へもひろがっていたであろうという記録を重視し、かつ

ない。現在、乙女塚古墳の位置を示す碑は、脇浜三丁目の国道二号とJR臨海線の交差するところの東南角に建っているが、もとの位置は現在地の約一〇〇メートル南側であったらしい。

この古墳について前方後円墳の可能性を説いた二人の先学がある。ひとりには「兎原・処女塚」(『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第四輯・昭和二年)の著者渡部多仲で、脇浜三丁目二〇四一番地の「南方ニ空地ヲ存シテ稍平地ヨリ高キモノアルヨリ見レバ、或ヒハモト前方後円墳ナリシヤモ知ルベカラズ」と記し、南向の前方後円墳であった可能性を示唆している。また「高さ二メートル半許り、上部ハ削除セラレ、ココニ老松一樹枯レナガラニ立テルハ痛マシ、ソノ古墳タルコトニ於テハ、葺石ト覚

て『撰津志』が天王塚の名を記しながら乙女塚の名を欠いていることから、両者を同一の古墳とみなし、前方部を西北西に向けた帆立具式の古墳として復元してみることもできる。この案も落合重信が復元に当たって使用したものと同じ『神戸市葺合区神戸区湊東区地籍図』明治四十三年刊を利用しており、その全長は一・二〇メートル程度と推定できる。いずれの案を採用するかは識者の判断にまつほかないが、両案ともに前方後円墳が一基図上で発掘できたことにはなるであろう。

念仏山古墳

旧生田川以西では長田区浜添通六丁目から荻藻通七丁目あたりに存在した念仏山古墳が、古くから五色塚古墳と同じような鱧付円筒埴輪の出土する古墳として知られていたが、その実態はほとんど不明であった。その所在地についても、東尻池という地名以外には確実な情報がなかったが、昭和五十三年（一九七八）になって浜添通六丁目の東端に、念仏山地蔵尊が祭られていることを確認し、この場所が念仏山古墳の一部であることを明らかにできた。明治三十九年（一九〇六）の陸地測量部の二万五〇〇〇分の一の地形図によると、この地に西北西から東南東にかけて瓢形の等高線が描かれており、その全長は約一六〇メートルもあり、また、明治四十年（一九〇七）ごろの地籍図によれば、同地は、西尻池字東浜山から字南浦にまたがる地域で、東西の全長約一九〇メートルにもおよぶ山林であったことが知られる。

これらの図を参考にしながら念仏山古墳の形状を復元すると、全長一九四メートルの五色塚古墳とほぼ同じ規模の、前方部を西北西に向けた前方後円墳であったであろうことが推定される。この古墳から発見された円筒埴輪は、現在兵庫県立歴史博物館に福原会下山人旧蔵資料として所蔵されており、それによると直径約四〇センチメートルで、五色塚古墳発見のそれとほぼ同時期の鱧付円筒埴輪であることが知られる。

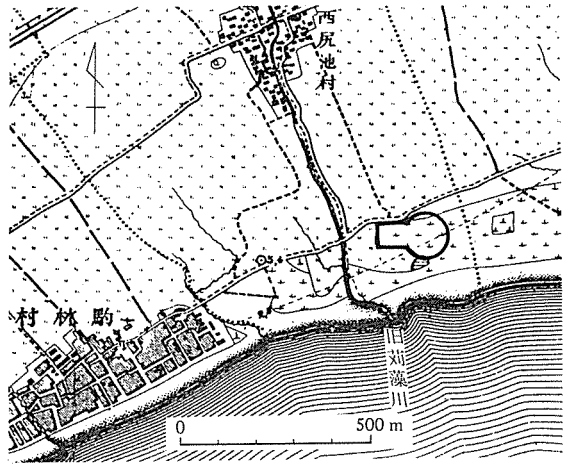


図 147 念仏山古墳比定図

そのほか、この古墳に関する情報はほとんどないが、大正五年（一九一六）ごろまで、旧叡藻川の東岸に、高さ五メートルあまりのうっそうとした小山が残存していたといわれており、明治十八年（一八八五）に測量されたわが国最古の近代的な二万分の一の地形図によれば、西側から南側にかけて、かつての真野の入江の痕跡が残っており一部は溜池になっていたことが記録されているので、砂堆上に立地した前方後円墳とはいえ、周濠をそなえた前方後円墳であった可能性もある。旧生田川以西須磨までの地域で最大かつ唯一の大型前方後円墳である。

旧生田川以西須磨までの地域では、念仏山古墳以外には大形前方後円墳は知られていない。したがって、古墳時代前期に、夢野丸山古墳・会下山二本松古墳・得能山古墳に葬られた首長たちを中心として、三ないし四のグループにわかれていた地域集団が、四世紀末または五世紀はじめに念仏山古墳の被葬者によって統一され、より大きな政治的社會を形成しつつあることを読みとることができる。

さらにいえば、より東方の、おそらくは芦屋川あたりまでの、六甲山地南麓全体を支配下におさめたのが念仏山古墳の被葬者ではなからうか。

そして、脇浜天王塚古墳については、これまでに築造年代を決定しうる資料を欠いているが、おそらく念仏山古墳の被葬者に続いて、五世紀中葉あるいはそれ以降に、この地を支配した首長の墳墓であったとも推定しうるのではなからうか。

垂水丘陵の

須磨以西はいうにおよばず、兵庫県下で最大の前方後円墳は、垂水丘陵先端部の、明石海峡五色塚古墳を見おろす位置に築かれた五色塚古墳である。

五色塚古墳の墳頂からは当時の可耕地は全く望めず、他の巨大前方後円墳との著しいちがいをみせており、被葬者の在地における性格の相違を示している。

五色塚古墳は、垂水区五色山四丁目の北から南へのびる標高約二二〇～一九メートルの丘陵を成形・盛土して築かれた前方後円墳で、墳丘の全長約一九四メートル、前方部幅（推定）八一メートル、後円部直径約一二五メートルの墳丘に、幅約一〇メートルの周濠をめぐらせた巨大古墳である。

墳丘先端から現海岸線までは約九〇メートル、濠底との比高約一五メートルで、その間を現在山陽電鉄・JR西日本および国道二号が通っている。

五色塚古墳の墳丘は三段に築かれているが、一段目は丘陵を前方後円形に削り出し、周囲の濠も整えたと推定されるが、作業用の通路は掘り残していたのか、掘削後再度盛土または架橋がなされたのかどうかは明らかでない。なお、作業開始にあたっては、付近一帯の雑草や灌木を除去するため、丘陵全体を焼いたらしく、旧地表面には木炭層がひろがっている。

中段および上段は盛土を施しているが、中段の下半は一部地山ちやまを利用してある部分もある。盛土に利用さ

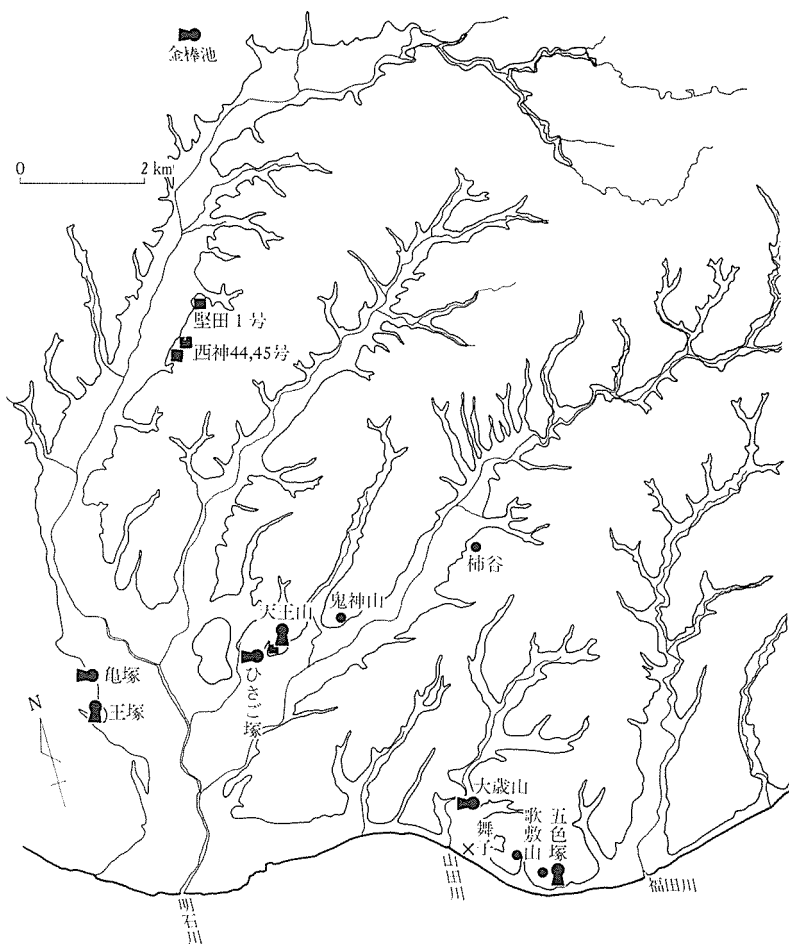


图 148 前・中期古墳分布图 (明石川流域)



写真 118 整備前の五色塚古墳

れた土砂は、おそらく周濠の掘削による土砂が多く用いられたのであろうが、この付近の地層は垂水礫層と呼ばれ、粘土と砂礫が互層をなして堆積しているので、掘削された土砂は、一カ所に集められて適当な配分で混ぜ合わされたのち盛土に利用されたらしい。

三段に築かれた墳丘の斜面にはすべて円礫が葺かれていたが、下段の葺石には径五〜一〇センチメートル程度のやや小形の礫を用い、上・中段には径一五〜三〇センチメートル程度の大型の礫を用いていた。

上・中段の葺石の産地については付近にその母岩は分布せず、おそらく淡路島から運ばれたものではないかとみられている。

『日本書紀』神功撰政元年春二月の条に「播磨に詣りて山陵を赤石に興つ。仍りて船を編みて淡路嶋に廻して、其の嶋の石を運びて造る」とあり、これが五色塚造営にかかわる伝承を伝えた記事であろうといわれている。

下段の石は付近の垂水礫層中から採集されたもので、周濠の掘削中にあらわれた礫層や、付近の崖面・海岸などで採取されたものが用いられたのであろう。下段の葺石が小形であることと、下段が地山を削り出して形成されているという事実は、おそらく関連する事柄であろう。

こうした葺石の量は、上・中段では一平方メートルあたり約

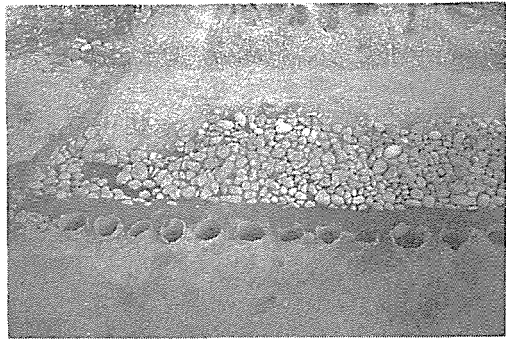


写真 119 葺石と円筒埴輪列（垂水区五色塚古墳）

七〇個、二四〇キログラム、下段では一平方メートルあたり約二四〇個、八〇キログラムであり、古墳全体では二二三万三五〇〇個、二七八四トンに達すると推定される。

葺石とともに古墳の表面を飾る埴輪は、斜面の中間に位置する二つのテラス面と、前方部・後円部ともに墳頂の平坦面にめぐらされている。二つのテラス面では前方部と後円部が連続しながら墳丘を一周しているが、後円部墳頂は円形に、前方部はコ字形に並んでいる。

埴輪は墳丘を築成後、溝状の掘形を掘り、一〇メートルに一八本の割合でたてならべられており、墳丘全体では約二二〇〇本がめぐっていたと推定される。

埴輪の種類は、円筒埴輪の両側に鱗をつけた鱗付円筒埴輪が最も多く、約八割を占めており、口縁部が外にひらいた鱗付の朝顔形埴輪と呼ばれている種類がそれに次いでいる。埴輪列の調査に際しての観察では、五本ないし六本に一本の割合で朝顔形埴輪が認められた。

また、蓋形埴輪が、三段にめぐる埴輪列の間から数点発見されているほか、家形埴輪や盾形埴輪の破片が少量ながら発見されている。

こうした大量の埴輪が、どこで焼かれたのかは不明であるが、古墳からそれほど遠くない位置で野焼きされたものだと推定される。

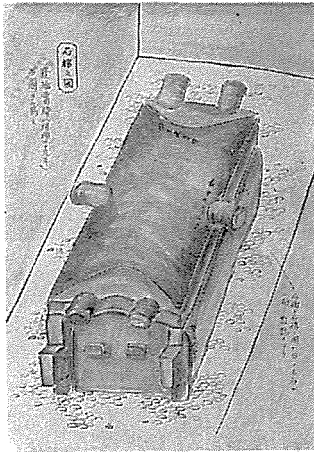


写真 120 長持形石棺写生図
(多紀郡雲部車塚古墳)

また、前方部・後円部ともに東側中段の埴輪列に接して径約四〇センチメートルの円形に近い掘形内に、径約一六センチメートル程度の柱を建てていたらしい遺構が検出されている。近年各地で検出されている木製の埴輪状飾物が、五色塚古墳においても樹立されていた可能性を示している。

五色塚古墳の埋葬施設については未調査であるが、後円部頂上から板状の割石が検出されているので、竪穴式石室が築かれていた可能性が高い。また、江戸時代の文献には、苔むした石棺の存在を伝えているので、それらを総合すると、竪穴式石室のなかに巨大な長持形石棺を安置していたのではないかと推定される。

副葬品については、全く不明であるが、墳頂部から石製合子の破片が採集されているので、古くに盗掘にあった、遺物は持出されてしまっている可能性が高い。

五色塚古墳の埋葬施設の中心的位置を占めたと推定される長持形石棺は、四世紀後半から五世紀前半にかけてのそれぞれの地域の中心的な古墳の埋葬施設に用いられた棺形式であることが知られている。

これまでに知られている長持形石棺は約五〇例であり、その分布も東北から北九州まで広いが、分布の中心はあくまでも大和、河内、摂津の各平野部とその周辺である。なお、主墳の墳丘以外にも、東側くびれ部外方に方形の土壇があり、後円部東側周濠内には、外堤から突出した造出し状の遺構があり、いずれも斜面には下段と同様の小形の葺石が施されている。



写真 121 五色塚古墳東側の方形土壇

東側外堤の造出し状遺構には、鱧付円筒埴輪二本をつらねた埋葬施設があり、陪冢ばいまつとしての役割をはたしていることが知られるが、くびれ部外方の方形土壇に埋葬施設が存したかどうかは不明であり、祭壇様の役割をはたしていた可能性もある。

また、前方部正面の中央には、下端の幅約五・二メートル、高さ約六〇センチメートルの通路状の遺構があり、この部分が墳丘の正面であった可能性を示している。この通路状遺構は、周濠を掘削後、再度盛土を施して築かれているが、その斜面には前方部正面の傾斜面と同じ葺石が連続して葺かれているので、墳丘築造当初から存在したものであろうと推定される。

壇を付設した墳形を、わが国では前方後円墳と呼びならわしているが、方形の部分が前面、あるいは正面であることを確実に示す資料はほとんどない。そうした意味でも五色塚古墳の前方部中央に付設された通路の存在する意味は大きい。

五色塚古墳の築造年代を推定しうる材料は少ないが、おそらく四世紀末に築造された古墳であろう。

小壺古墳

五色塚古墳の西に接する小壺古墳は、直径約六七メートル、高さ約九メートルの二段築成の円墳に造出しを付けた帆立貝式古墳である可能性がある。埋葬施設は未調査であるが、墳頂と中



写真 122 歌敷山東古墳粘土槨

段テラス面には円筒埴輪をめぐらしている。円筒埴輪の形式をみるかぎり、五色塚古墳とほぼ同時代に築造されたらしく、両墳の先後関係は不明である。そのほか五色塚古墳の周辺には遊女塚、小塚、四ツ塚、七ツ塚などが存在したといわれているが、くわしい位置は不明である。

歌敷山東・

小壺古墳のさらに西約五〇〇メートルの台地上に歌敷山東・西両墳が存在した。

西古墳

東古墳は直径約三五メートル、高さ約三メートルの円墳で、埋葬施設は割竹形木棺の周囲を粘土で取りまいた全長約四・八メートル、幅約一・二メートルの粘土槨で、鉄剣、鉄斧、刀子が棺外から発見されている。

西古墳は直径約二〇メートルの円墳で、埋葬施設は長さ約四・八メートル、幅約八五センチメートルの粘土槨で、棺内から鉄剣が発見されている。

両墳とも鱗付円筒埴輪をめぐらし、蓋形埴輪を伴っていたらしく、五色塚と同時期かあるいはやや遅れて築造されたものであろう。

なお、歌敷山東・西古墳の西約八〇〇メートルの舞子公園付近には円筒棺の群集する地点が知られており、そのうちの一基からは四〇歳代の男性人骨が発見されている。この円筒棺群も五色塚古墳とほぼ同時期のものであると推定される。

以上のように、五色塚古墳とその周辺の遺跡群は、ほぼ同時期の古墳群としてとらえることができよう。

それ以前に、顕著な遺跡をもたなかった福田川と山田川の間中の丘陵上に、なぜ突如このような大古墳を含む古墳群が出現したのだろうか。さらに西方の明石川流域全体を含めても、これほどの大前方後円墳を出現させる力を持っていたかどうかはにわかに決しがたい。

おそらく五色塚古墳に葬られた首長は、眼下に見下ろす明石海峡はいうにおよばずその墳丘斜面を飾る葺石を淡路島より運んだとみられることよって示されているように、明石海峡をへだてた淡路島をも支配下におさめるほどの勢力をもっていたとも推定される。

このような強大な力が、須磨以西の明石川流域を含む地域の統合によって結集しえたのか、この地方を支配するために畿内政権から派遣された豪族によって実現しえたのかは不明というほかないが、この地域が、四世紀末あるいは五世紀初頭に、畿内政権を支える一地域に含まれていたであろうことは確実である。

明石川流域の大形

明石川流域で最も大形の前方後円墳は、西区王塚古墳である。明石川西岸の標高約二五

前方後円墳・王塚

メートル、水田地帯との比高一〇メートルばかりの段丘上に位置する前方後円墳で、全

長約七〇メートル、前方部幅約四〇メートル、後円部径約四〇メートルの前方部を南へ向けた古墳である。前方部・後円部ともに高さ約六メートルで、幅約一五メートルの周濠をめぐるせており五世紀でも中葉の古墳であることが知られる。

舎人姫王の墓に比定され陵墓参考地に指定されているためくわしい調査が不可能で、埋葬施設などについては明らかにされていないが、円筒埴輪・人物埴輪・馬形埴輪などが発見されたといわれている。



写真 123 特殊器台形土製品
品 (岡山県女男岩遺跡)

この王塚古墳の被葬者こそ、明石川流域とその周辺の在地勢力を統合し、その力を結集した豪族であろう。なお、この五世紀中葉の段階には、まだ北神戸地区に大形の前方後円墳は成立していない。

3 豪族の居館と農民の家

古墳被葬者の居館 古墳に葬られるような人たちの住居が、高床あるいは平地式の建物であったろうことは、家形埴輪や家屋文鏡に铸出された家屋図によって知ることができる。

また、『三国志』魏志倭人伝には邪馬台国の女王卑弥呼の居館は「宮室・楼観・城柵、蔽かに設け、常に人有り、兵を持って守衛す」と記されており、家形埴輪や家屋文鏡の示すところと一致している。

高床の建物が、わが国ではじめて出現するのは弥生時代前期のことであり、それは稲倉としての機能をもつ建物であったらしい。

そうした高床の建物が住居あるいは宮殿として利用されはじめるのは、弥生時代後期から古墳時代はじめにかけてのことであり、いわゆる大形墳丘墓の出現と期を同じくしているように思われる。

岡山県倉敷市の女男岩遺跡から発見された特殊器台と呼ばれる土器の上にのせられた家形土製品が、平地

式の住居を立体的に表現した最古例であろう。この家は、平側四間、妻側三間で、寄棟風の屋根の上に屋根形の棟をのせたような形であるが、入母屋風の屋根を表現しようとしたのではなからうか。平入の入口は中央に大きく取り、入口の両側に各二間を表現しているので、入口側は中央部が広い五間のようにつくられている。

家形埴輪

前期古墳の外表を飾る家形埴輪としては、前期後半に築造された三重県石山古墳例がよく知られている。石山古墳は全長約一二〇メートルの前方後円墳であるが、家形埴輪は後円部頂上の方形区画内で数個、くびれ部上方の方形区画内からは十数個発見されており、入母屋風の屋根をもつ例、切妻造や片流れの屋根をもつものなど多様な構造の建物がすでに存在していたことを示している。なかには切妻または入母屋風の屋根で、棟木を受ける斗と束を線彫した例があり、当時すでに組物の技術がおそらく大陸から伝えられ、支配者層の建物に使用されはじめていたことが知られる。こうした組物の表現は大阪府美園遺跡の四世紀末から五世紀はじめの家形埴輪にもみられる。

神戸市域では、家形埴輪は数例知られているだけであるが、五色塚古墳および小壺古墳の発見例は比較的古い例だといえよう。特に小壺古墳の家形埴輪は入母屋風や切妻風の屋根の部分が知られているが全容が復元できないのがおしまれる。

家屋文鏡

また、四世紀代の建築の立面形を示す好例に奈良県佐味田宝塚古墳から発見された家屋文鏡がある。家屋文鏡には四種類の家屋図が描かれているが、一つは千木をかかげた切妻造の高床の建物で、屋根は棟を網代あじろでつつみ、棟が軒に比べて著しく長い。壁は板壁らしく、桁行は二間で一方の妻側

に梯子を^{はしこ}かけており、神殿あるいは倉庫風の建物である。その二は千木をかかげた入母屋風の高床の建物で、壁は板壁らしく桁行は三間、一方の妻側に欄干をつけた階段をとりつけ、他方には露台を付設し、その上に蓋をさしかけており宮殿風の建物といえよう。その三も入母屋風の建物で平地式、壁は板壁。その四は竪穴住居風に屋根の部分だけを地上に伏せた建物で一方の妻側に入口らしき施設をつくり、ここに蓋をさしかけている。ここでも多様な住居の形態が、機能に応じて使い分けられていたらしいことが知られる。

掘立柱建 こうした高床や平地式の住居は、遺跡においては掘立柱物群 の柱穴群という形でのみ存在し、発見されにくい遺構であるが、近年の発掘調査の増加と精密化によって、ようやく四～五世紀の掘立柱建物群の調査例が知られるようになってきた。

奈良県脇本遺跡では、方形の柱掘形の一边が一メートル前後もある奈良時代の宮殿に匹敵するような大形の掘立柱建物群が発見されつつあり、伝承に残る五世紀代の雄略天皇泊瀬朝倉宮との関連が推測されている。また、群馬県三ツ寺一遺跡では、六世紀の例であるが、一辺約八六メートルの方形区画の外周に濠を掘り、濠の内側斜面には河原石であたかも古墳の葺石のような石垣を築き、濠の内側に沿って柵列をめぐらし、さらにその内部を柵列によっていくつかに分割し、それぞれの区画内にいくつかの建物を配するという居館と

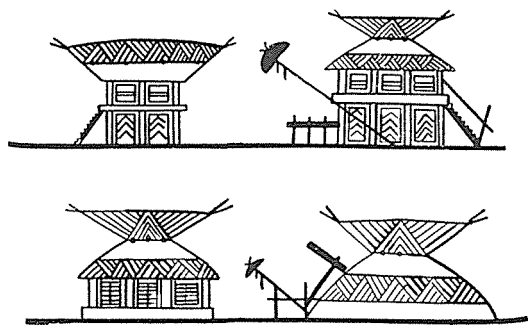


图 149 家屋文鏡の家屋図 (奈良県佐味田宝塚古墳)

呼ぶにふさわしいような遺跡も発見されている。

松野遺跡

神戸市域では長田区松野遺跡で五世紀末から六世紀はじめにかけての豪族層の居館と呼ぶにふさわしい遺構が発見されている。

松野遺跡は、妙法寺川東岸の砂堆状の微高地上に形成された集落で、遺構面の標高は約八メートル、古墳時代の遺構としては八棟の掘立柱建物、竪穴住居一棟、柵によって囲まれた方形区画三カ所以上などが発見されている。そのうち方形区画の規模がほぼ明らかなのは二例で、規模の大きいほうが古く(二期)、柵列は長辺約五一メートル、短辺約四二メートルで、両短辺の外側には幅二・三・五メートルの溝を伴っている。この時期の方形区画に伴うと推定される建物は、柵列の東北隅部よりの位置にある竪穴状の建物とその南側の二間×二間の掘立柱建物である。この二棟の建物は、区画内の東端近くに位置すること、一方が竪穴状の建物であること、他方の掘立柱建物の掘形が他の七棟の掘立柱建物に比して著しく小形であることなどから推定して、中心的建物とは考えられない。

次の時期(二期)の方形柵列はやや狭く、東西約三九メートル、南北約三二メートルで南側柵列の中央部で約一・八メートルのくいちがいをみせており、この部分が入口であったと推定されている。

この方形区画中央には、南北棟の二間×三間の総柱で棟持柱をもつ建物が存在し、おそらく家屋文鏡にみえる切妻造の高床建物、あるいは伊勢神宮の内宮・外宮本殿のような建物であったと推定される。

この中心建物の東側には三間×三間の総柱建物の東側に小形の柱列が付いている建物があり、家屋文鏡にみえる入母屋風建物の一方の妻側に露台を付設した例と同じ構造の建物であろうと推定される。また、この

第一節 前方後円墳の成立と発展

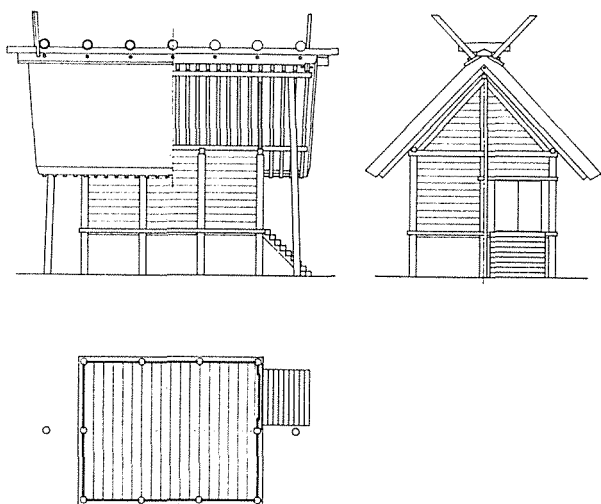


図 150 松野遺跡高床建物復元図

方形区画の北西部には二間×三間の総柱建物が付設している。この三棟の建物が一期・二期いずれの方形区画に伴うものかはにわかに決しがたいが中央部の二棟はいずれも立て替えが行われた可能性があり、二期とも同一位置に建物が存在した可能性が高い。

なお、この二期の方形区画の北側にも、やや方位の違う方形区画があり、その内部にも総柱建物が存することが知られており、二期の方形区画と同時期に存在したのではないかと推定されているが、くわしいことは不明である。

いずれにしても、遺構の分布は周辺部へひろがる可能性があり、このような方形区画とそれに伴う建物群がいくつか集まって一集落を形成していたのか、方形区画の周辺に、堅穴住居を中心とする庶民の住居群が存在したのかは興味ある問題であるがいまは不明というほかはない。今後の調査の進展をまちたい。

松野遺跡にみられるような濠や柵列に囲まれた掘立柱建物群が、古墳に葬られるような支配者層の住居であることは確実であるが、古墳時代後期になると、のちに述べるように横穴式石室を埋葬施設とする後期



写真 124 生田遺跡全景

群集墳が盛行し、こうした中・小古墳に葬られた人たちもまた掘立柱建物をその住居としたにちがいない。

カマドをも それでは古墳に葬られなかった大多数の一般庶民はどのような住居に住んでいたのだろうか。

つ堅穴住居 おそらくそうした人たちは前代にひき続いて堅穴住居に住み続けた。

縄文時代以来、堅穴住居の平面形は、円形または楕円形が一般的で、弥生時代後期ごろから隅円の方形堅穴住居が出現し、やがて古墳時代に入ると隅部の方形化が一層進み、規格性の高い住居になってくる。

そうした堅穴住居にも顕著な変化があらわれる。堅穴住居の一边に造りつけられたカマドの出現である。

堅穴住居に炊事用の、あるいは暖をとるための施設として炉が造りつけられるのは縄文時代以来一般的な事柄である。その炉がカマドに取って代られるのは古墳時代中期以降のことであり、おそらくは煙道を造りつけることによって火力を強めることを知る須恵器生産のはじまりと深くかかわっているのではないかといわれている。

神戸市域で、堅穴住居にカマドをとりつける例は近年各地で発見されているが、中央区生田遺跡で発見された五世紀前半の1号堅穴住居が最も早い例である。

また、東灘区郡家遺跡では、六世紀前半および後半の堅穴住



写真 125 カマドをもつ方形竪穴住居
(西区西神第62号遺跡)

居で、北側の壁際に造りつけられたカマドから煙道が壁の外までのび、さらに東側に曲ってのびている例が知られている。こうした施設は、煙道を長くして煙のひきをよくする工夫ともみえるが、あるいはオンドルのような性格をもっていたのかもしれない。

なお、こうしたカマドをもつ竪穴住居の周辺に掘立柱建物が群在する例は多く、五世紀後半以降両者がセットになって一集落を形成する例が増加する。

明石川流域の櫛谷川支流菅野谷川の段丘上に位置する西神第62号遺跡で発見された古墳時代後期の集落は、掘立柱建物五棟と方形の竪穴住居三棟が知られており、六世紀前半の方形竪穴住居にはカマドはないが、六世紀中葉の竪穴住居には西側にカマドが取りつけられており、この地域で竪穴住居にカマドが設けられる時期を示している。

また掘立柱建物は、倉庫のような二間四方や二間×三間の総柱建物のほか一間×三間の建物もあり、竪穴住居と倉庫がセットになっているほか、このような小規模な集落にあっても掘立柱建物の使用がはじまっていることを物語っている。

後期の方形竪穴住居の一边にカマドをとりつけた例は玉津の高津橋・岡遺跡をはじめ、平野町の黒田遺跡や常本遺跡でも発見されているし、北区の山田・中遺跡においても同様の例が知られているので、一般的な傾向であったことは確実である。

第二節 群集墳の時代

1 縮小する前方後円墳

小形前方後円墳 五世紀末～六世紀はじめ以降、大和盆地周辺部を除く地方では、前方後円墳をはじめとする古墳の規模は著しく縮小し、かわってその数が急増する。かつて巨大古墳に葬られたような人々

の権力は、畿内中枢の政権内にのみ残存し、地方にあってはより広い範囲の人々が古墳を築造しうる力を持ち、畿内政権の勢力下に連なっていた。

芦屋川以東では近年墳丘の一部が発見された打出小槌古墳が、その墳形は前方後円形か方形かは不明ながら家形・盾形・靴形・蓋形・人物・猪など多様な形象埴輪を伴っており、五世紀後葉から六世紀はじめにかけての地方首长層の墳墓の一つの基準を示している。

芦屋川以西住吉川までの地域では、この時期の古墳の良好な資料を欠いているが、芦屋市三条岡山遺跡、芦屋廃寺付近、神戸市東灘区森北町四丁目などから少量ながら形象埴輪や円筒埴輪の破片が出土しているの

で、付近に五世紀末から六世紀はじめにかけての古墳が存在したことは確実である。



写真 126 埴輪をめぐるせた古墳（東灘区住吉東古墳）

住吉東古墳

住吉川以西石屋川までの地域ではJR住吉駅付近の古墳群が注目される。

この付近の古墳としては古くから坊ヶ塚古墳（前方後円墳・全長約四〇メートル）の存在が知られているが、近年市街地再開発工事に伴う調査で住吉本町一丁目、住吉宮町七丁目、同四丁目などから次々と中期末から後期へかけての古墳が発見されている。

そのうち住吉東古墳と命名された住吉宮町四丁目の古墳は直径約一八メートルの円墳の西南部に長さ約六メートルの造出し部を付けたいわゆる帆立貝式の古墳で、全長約二四メートル、円丘部は二段築成であったと推定されるが上半部は全く削平されてしまっている。しかし、円丘部のテラス面とそれに続く造出し部には、ほぼ完全な形で円筒埴輪列がめぐっているのが発見された。円筒埴輪の総数は約一六〇本、円筒埴輪列の間や外側から約一〇本の朝顔形埴輪も発見されている。朝顔形埴輪は円丘部の南側から造出し部に点々と配されており、他に馬形埴輪一体と人物埴輪一体が円丘部南側の円筒埴輪列の内側から、また、人物埴輪二体も南側くびれ部の円筒埴輪列の内側から発見されており、墳丘の南側を意識的に飾っていることが知られる。

馬形埴輪は鞍や鐙などを丁寧に表示しており、また、人物埴輪は三体とも女性で、その鳥田髷のような結髪はいかにも巫女風である。

埋葬施設は、円丘部中央に位置する長さ約四・三メートル、幅約一・九メートルの墓壇内に、長さ約三・二メートル、幅約七〇センチメートルの箱形の木棺を置き、鉄製の直刀一本が副葬されていた。また墓壇内から鉄鏃も発見されている。

なお、この古墳は埋葬施設や外表施設が明らかになっていないばかりでなく、墳丘の築造過程やその間に行われた各種の儀礼についてもある程度明らかにできたことは注目すべきである。

住吉東古墳は、標高約二メートル付近の扇状地末端近くで、まず周濠を掘って墳丘の基段部をつくり、その際にまず祭祀を行い、使用した土器や埴輪を濠中に投棄したのち約八〇センチメートルの盛土をして墳丘の下段をととのえている。なお、この溝から発見された埴輪のなかには家形埴輪が含まれていた。

ここで墳頂平坦面中央に喪屋と推定される三間×三間の掘立柱建物を建て、その西側に祭壇状の施設が存したらしく一間×二間の掘立柱の施設の痕跡がみえる。この建物内で一定期間「もがり」が行われたのち、同じ場所に木棺に入れた遺体を葬り、その上部に盛土を行っている。建物の北側には五個の柱列が東西に並んでおり、葬送儀礼の際の目隠状の塀と推定されている。

二度目の盛土に際してテラス面をととのえ、その内側に人頭大の河原石をめぐらし、最後に埴輪列をめぐらしたものと推定される。

この帆立貝式の古墳の近くからは、この古墳に先行する五世紀後半に属する一辺約一〇メートルの方墳が

二基発見されており、この時期にすでに群集墳を形成しつつあったことが知られる。

住吉東町の西約四〇〇メートルの住吉宮町七丁目でも一辺一三・三メートルの大小の方墳一一基が周溝を接するように群在している地点が調査されており、なお付近には多くの古墳が存在するらしいことが知られている。なかには二段に築かれた墳丘のテラス面に円筒埴輪をめぐらし、斜面に葺石を葺いた後期はじめの例も知られている。

また、郡家遺跡の大蔵地区でも、埴輪ではないかと思われる遺物が発見されているので、付近に同時期の古墳が存在した可能性は高い。

十善寺古墳

石屋川以西都賀川までの地域では、墳丘その他の状況が不明であるが、灘区一王山十善寺境内の十善寺古墳からは卍字形鏡（直径約一〇・四センチメートル）、四獣鏡（直径約九・二センチメ

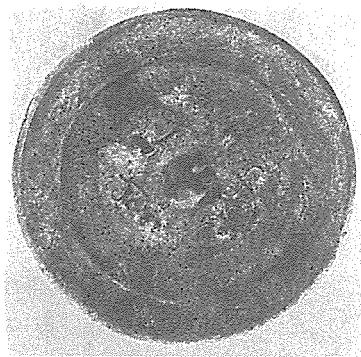


写真 127 卍字文鏡（灘区十善寺古墳）

ートル）をはじめ玉類、鉄器類などが発見され東京国立博物館に保管されているが、土器や埴輪類も発見されたと伝えられており、期末から後期はじめにかけての古墳であった可能性が高い。

都賀川以西では、市街化が早く進行したせい、中小の前方後円墳ないしは中期末から後期はじめにかけての埴輪を伴うような古墳はほとんど知られていない。わずかに横穴式石室を埋葬施設とする中央区山本通五丁目の中宮古墳や内容は不明ながら兵庫区氷室町の御塚、長田区池田広町の野々内古墳が前方後円墳であったと伝えら

れている。

大蔵山2 旧播磨国の地域に入ると、塩屋谷川・福田川の流域では、後期初頭の古墳はまだ明らかではな

号墳 いが、山田川流域では、現在大蔵山の公園として保存されている地域内に、大蔵山2号墳と呼

んでいる前方後円墳が存在している。全長約二八メートル、前方部幅約一〇メートル、高さ約一・五メートル、後円部径約二〇メートル、高さ約二メートルの西向の前方後円墳である。後円部頂上には横穴式石室と推定される石室が存するがくわしいことは不明である。六世紀前半の須恵器が発見されており、なかには人物・動物・小壺などの装飾を付けた土器も認められる。

出合古墳群

明石川流域では下流から上流まで前方後円ないし帆立貝式の古墳が点在しているが、中流西岸の西区玉津町出合の、標高約三〇メートルの台地上で、帆立貝式の古墳（亀塚古墳）一基、

方墳一基、円墳三基の周溝だけが残存していることが確認されている。

亀塚古墳（出合1号墳）は全長約二八・五メートル、後円部径約二一メートル、前方部幅約一三メートル、くびれ部幅約九メートルの帆立貝式古墳で、馬蹄形の幅三〇三・五メートルの周濠をめぐらせており、前方部を西向に造り出している。墳丘は約五〇センチメートルの高さしか残っておらず埋葬施設については全く不明である。

遺物は、六世紀はじめの須恵器と、須恵質・土師質の円筒埴輪、家形・太刀形・盾形・人物・動物などの形象埴輪が認められる。

方墳（出合2号墳）は一辺約一一メートル、周濠を含めて一辺約一四メートルの方形墳であるが、築造時期

亀塚などとの関連が注目される。

金棒池 1

号墳

明石川上流域の北側にひろがる神出地域では、雌岡山と雄岡山の中間の谷間にある金棒池 1 号墳と呼ばれている前方後円墳が知られている。

全長約三メートル、後円部径約一八メートル、高さ約三メートルで墳丘の中央部には西側から大きな穴

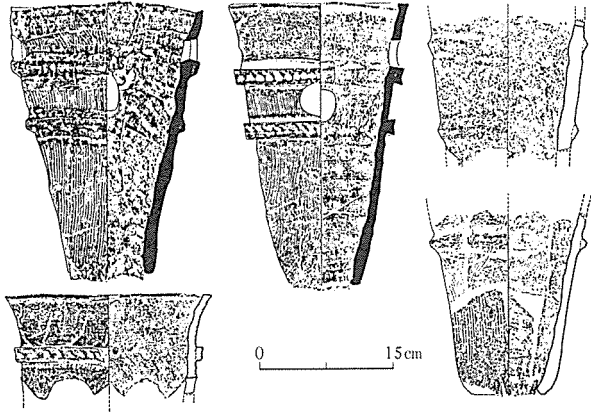


図 151 亀塚古墳発見円筒墳輪実測図

を示すような遺物は発見されていない。

円墳三基のうち 3 号墳は直径約一メートル、周濠の幅約三・五メートルで五世紀後半の須恵器（高坏）が発見されている。

亀塚付近からは四〜五世紀のものと推定される墳輪片も見されており、そのなかには直径約四〇センチメートル以上の大形円筒墳輪も含まれており、西側の台地上に同時期の古墳が存在した可能性を示している。

亀塚古墳の立地する台地の東側にひろがる標高一二〜一五メートルの沖積地には、弥生時代から古墳時代へかけての住居群が存在するが、古墳時代の遺構は五世紀から六世紀前半までの一辺四〜六メートルの方形竪穴住居で、遺物も初期須恵器や韓式系土器など注目すべきものを含んでおり、王塚、

があけられており、埋葬施設は不明である。前方部も西側から土取りが行われていて全貌は不明であるが、復元幅約一九メートル、現存高は約一・三メートルである。葺石、埴輪など外表の施設はなく、出土品も不明であるが宮内庁書陵部に神戸市垂水区神出町古神字丸ヶ岡発見と伝えられる直径約九・八センチメートルの小形銅鏡の破片が所蔵されており、おそらく金棒池1号墳から発見されたものであろうと推定されている。

天王山第 3号墳 明石川の支流伊川の流域では、北別府の天王山第3号墳

が、埴輪をめぐらせた帆立貝式の古墳である。円丘部は直径約二〇メートル、高さ約二・五メートルで、西側に長さ約五メートル、先端幅約一〇メートル、高さ約一メートルの扇状にひらいた造出部を付けている。

造出部の周辺および円丘部の中段に円筒列がめぐっており、円丘部は二段築成であったと推定される。

造出部の円筒埴輪列の内側には須恵器の器台、甕、坏などの一群がおかれており、北側のくびれ部裾からも須恵器蓋坏および土師器坏の一群が発見されている。また造出し部には人物・馬形・盾形などの形象埴輪片が集中しており、形象埴輪列が存したらしい。

以上のような墳丘部の調査は、昭和四十七年（一九七二）に行われた遺跡範囲確認調査および昭和五十五年

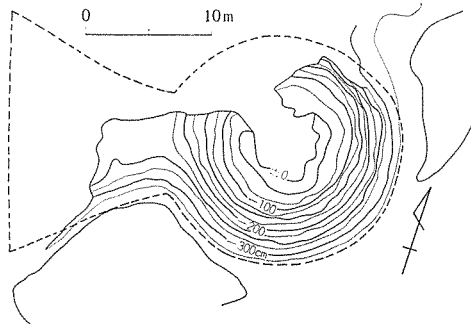


図 152 金棒池1号墳平面実測図

第二節 群集墳の時代

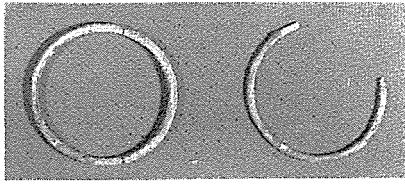


写真 128 銅 劔 (西区鬼神山古墳)

の天王山第4号墳の破壊に先立つ調査として行われたが、埋葬施設については、この古墳が史跡公園として保存されることに決定したため発掘調査が行われていない。おそらく箱形の木棺を直接埋納したものである。

天王山第3号墳の北側に続く尾根上にはさらに三基の小円墳が存するが、いずれも円筒埴輪をめぐらしていたらしく、埋葬施設は未調査ながら、五世紀末から六世紀はじめにかけての初期の群集墳であったことが知られている。

鬼神山古墳

伊川流域では天王山の東約〇・七キロメートルの伊川谷中学校付近にも埴輪をめぐらせた古墳が存したことが知られているが、そのうちの鬼神山古墳は、付近の土取り工事と乱掘によって不明な点が多いが、直径約一四メートル、高さ約一・五メートルの円墳であったらしい。墳丘裾部がほとんど削り取られてしまっているため造出し部のような施設が存在したかどうかは不明である。

埋葬施設についてもほとんど記録されていないが、乱掘後の緊急調査で変形獣文鏡、鉄刀、銅劔、玉類などが発見されており、長さ約二メートル、幅約七〇センチメートルの箱形の木棺(A棺)が墳丘の中央付近に東西に埋置されていたことは確実である。また、乱掘に立合った人たちの聴き取りによると鏡の発見された棺の北側にももう一基の木棺(B棺)が並んでいたらしく、この棺からは須恵器、馬具、工具、鉄鍬などが発見されたという。

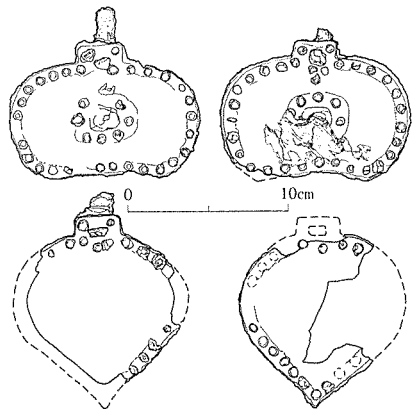


図 153 杏葉・鏡板実測図
(西区鬼神山古墳)

遺物のほとんどが乱掘によって発見されたものであるため、どちらの棺から出土したかを確定できないものが多いが列記すると次の通りである。

変形獣文鏡、直径一三・二センチメートル。銅釧二点。一つは直径約七・二センチメートルで外面に刻目文が施されている。他の一つは無文で直径約七・一センチメートル。馬具は杏葉三点、鏡板一対はいずれも鉄地金銅張で他に轡と飾金具を伴っている。武器は鉄刀（全長約五四センチメートル、全長三五センチメートル、全長六〇センチメートル以上の三点）、鉄鎌

は細根形、広根形を含めて推定七〇〜八〇点。他に鉄器としては槍鉋、刀子などが数点ずつ発見されている。玉類は勾玉（めのう製三点、ガラス製一点）、管玉（碧玉製一点、切子玉（水晶製七点）、丸玉、小玉など）があり、管玉のなかに未製品が一点含まれている。伊川流域では本流明石川との合流点近くの新方遺跡で弥生時代以来玉造りが行われていたことが知られているが、この鬼神山古墳の被葬者が何らかの形で新方における玉造りとかかわっていたであろうことが推測できる。須恵器は多量に出土したといわれているが、提瓶、埴、器台、蓋坏などが確認できる。この蓋坏のなかには六世紀初頭のものやや時期の下るものとの二種が含まれており、A・B二棺の時期差が存した可能性を示している。おそらくA棺が古く、B棺が新しい時期に属するであろう。

なお、鬼神山の北方にも人物埴輪や家形埴輪が出土した古墳が存したらしいが、乱掘によって遺物が発見されたため、くわしい出土状況は記録されていない。

武庫川中流域 武庫川中流ではこれまで顕著な前方後円墳は知られていなかったが、最近三田市下田中の**前方後円墳** 武庫川と有野川が合流するあたりの北側、東西にのびた標高一八〇～二〇〇メートルの丘陵上で全長約四八メートル、前方部幅約二二メートル、後円部径約二八メートル、高さ約四メートルの山王社古墳が発見された。埋葬施設その他は未調査であるが、おそらく五世紀末～六世紀はじめのこの地方の首長墓であろう。

山王社古墳の周辺には、大小約七〇基の古墳が存在し、下田中上山古墳群と呼ばれているが、なかには上山59号墳のように帆立貝式の古墳も含まれている。埋葬施設は木棺を直接土中に埋納した例が多いが、一部横穴式石室墳も存在する。おそらく五世紀末以降六世紀代に築造されたものであろう。

2 木棺直葬墳と横穴式石室墳

群集墳の出現 六世紀に入ると、古墳に葬られるような人々の性格が一変する。五世紀後半以来、被葬者の数は急増し、それぞれの地域の小首長層ばかりでなく、村々の主要な構成家族の長とその一族もまた古墳に葬られるようになる。いわゆる群集墳の発生である。

初期の群集墳は、五世紀後半以来徐々にその数を増加しつつあった小形の前方後円墳や帆立貝式古墳の周

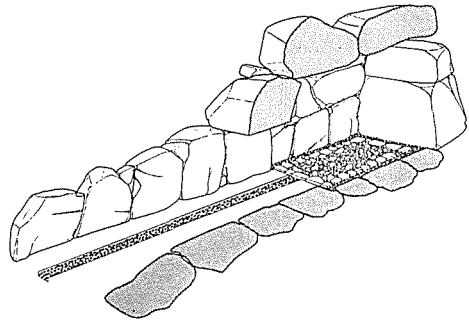


図 154 横穴式石室模式図（奈良県石舞台古墳）

辺に、小形の円墳や方墳を築き、箱形の木棺を直接墳丘内に埋納するいわゆる木棺直葬墳が多く、なかには小形の円筒埴輪をめぐらすものもあり、副葬品には須恵器と鉄刀、鉄鏃などの鉄製武器が多い。六世紀以降には大形の石を積みあげてつくる横穴式石室墳を築くものもあらわれ、なかには家形石棺を埋納し、副葬品に馬具が加えられている例もある。

横穴式石室墳の築造には、石材が供給可能かどうかという地理的条件が伴うが、石棺の採用や馬具の副葬は、被葬者が村々の有力家族の長であったことの証拠であった可能性が高い。このように副葬品に馬具を含んでいることや、ほとんどの後期古墳の副葬品に鉄製武器が含まれていることは、後期古墳の被葬者が、単に村落内の有力家族の長であるというだけでなく、それぞれの地域において、畿内政権に連なる武力的、政治的権力の一翼をになう人々であったことを如実に示している事柄であろう。

六甲山地南麓の群集墳

六甲山地南麓一帯は、明治以来の急速な市街化工事で消滅してしまった遺跡が多く、なかでも地上に人工の盛土を築いている小形の古墳にその例が著しい。

この地域の後期古墳については、『神戸市史』別録一（大正十三年）、戦後の神戸地方古墳調査保存準備の会『神戸地方古墳地名表―旧武庫・菟原・八部・有馬・美囊・明石の各郡―』（昭和三十一年）、神戸新聞社社会

第二節 群集墳の時代

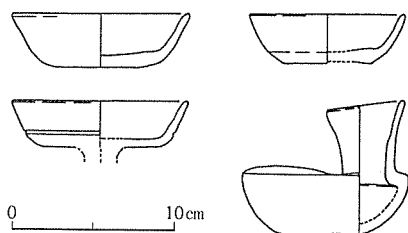


図 155 生駒古墳発見の須恵器

部編『祖先のあしあと』Ⅳ（昭和三十六年）などによってその概略を知ることができる。また、最近では市街地の再開発に伴う工事で、地下に埋もれて残存していた古墳が発掘調査される例も多くなっており、両者をあわせてこれまで記録された例を以下列記しておきたい。

芦屋川以西住吉川までの地域では、東端に芦屋地域の城山群集墳および三条群集墳が存在し、現存する古墳の多いことが知られている。

城山群集墳は昭和初年まで多くの古墳が存在したといわれているが、城山の中腹から山麓の芦屋川支流高座川までの地域に約一〇基の横穴式石室墳が現在知られており、高座川をはさんで西側の山麓には三条群集墳の七〜八基の横穴式石室墳が確認されている。この両者を一つの古墳群として二支群を含む群と考えることもできる。

神戸地域の東端では本山町森から中野へかけて横穴式石室を埋葬施設とする群集墳が存したらしいが、現存するのは神戸女子薬科大学構内の生駒古墳のみになってしまった。

生駒古墳は、標高約七八メートルの地点に位置する直径約一五メートル、現存する高さ約四メートルの円墳で、埋葬施設は無袖式の横穴式石室である。石室の全長は約一〇メートル、奥壁付近の幅約一・七メートル、高さ約二メートルで、石室内から発見されたと伝えられる須恵器や鉄器類が神戸女子薬科大学に保管されている。



写真 129 六甲山地南麓の群集墳（東灘区西岡本）

また、保久良神社の西南麓の八幡谷にも群集墳があり八幡谷をへだてた西側の岡本梅林にも群集墳が存したことはよく知られている。岡本梅林群集墳には小形石棺を蔵する石室が二基記録されており、神戸市域の群集墳としては珍しい。また、この群に含まれる八幡谷古墳は、全長八・二メートル以上の片袖式横穴式石室墳で、玄室内には組合せ式の石棺が埋納されており、馬具一式をはじめ多数の遺物が発見された。

なお、この地域では西岡本野寄にも横穴式石室を埋葬施設とする群集墳が存したことが知られていたが、最近再開発に伴う発掘調査で二基の横穴式石室が発掘され、付近から円筒埴輪も発見されている。

住吉川から石屋川までの地域では、JR住吉駅構内に、住吉東古墳とその周辺の古墳に続く時期の群集墳が存在しているが、昭和六十二年（一九八七）に兵庫県教育委員会が発掘調査した地点では、方形の墳丘が削平されてしまっているような状態で墳丘の下半部が発見され周溝内からは六世紀初頭の台付蓋環や蓋環などの須恵器が発見された。

また、郡家遺跡北方の御影山手および鴨子ヶ原付近にも後期群集墳が存在したといわれているが全く消失

してしまっている。

石屋川以西都賀川までの地域では、楠丘町や伯母野山で横穴式石室が発見されている。

都賀川以西旧生田川までの地域では篠原南町付近に存在した鬼塚古墳が、記録されている数少ない横穴式石室墳である。

中期の大形前方後円墳である天王塚古墳の周辺にもいくつかの古墳が存在していたことが知られており、あるいは後期の群集墳を形成していたかもしれない。

また、旧生田川東岸の旗塚通から生田町にかけての地域では横穴式石室を埋葬施設とする群集墳が存在していた。そのうち旗塚古墳は横穴式石室内に組合せ式の石棺が埋納されていたという。石室の規模は不明な点が多いが、奥壁の幅約二・四メートルと記録されているので相当大規模な横穴式石室であったことが知られる。石室内からは刀剣、鉄鏃、紡錘車、須恵器などとともに馬具が発見されている。

旧生田川から旧湊川へかけての地域にも、いくつかの群集墳が存在したらしいが、現存するものはほとんどない。

そうした群のうち北野町から山本通へかけての山麓一帯には、三本松古墳、城ケロ古墳、中宮古墳、黄金塚古墳、氷雨塚古墳などの名を記録にとどめているが、いずれも横穴式石室を埋葬施設とするものであったらしい。

また、縄文海進期の汀線近くのJR三ノ宮駅から元町駅へかけての一帯にも馬塚をはじめいくつかの古墳が存したらしいし、JR神戸駅付近にも姫塚、化粧塚、差方塚などと呼ばれる古墳が存したことが知られて

いる。しかし、いずれもその内容がほとんど知られていないのは残念である。

この地域ではもう一カ所雪ノ御所町から荒田町にかけても横穴式石室を埋葬施設とする群集墳が存在していた。そのうち荒田町三丁目の荒田八幡神社の社地は、周囲の人家から一段高く、かつての墳丘のありさまをよく残しているものと推定される。

旧湊川以西旧荻藻川までの地域では夢野丸山古墳の位置する丘陵南側の氷室町付近に一群と、念仏山古墳の周辺にも後期群集墳が存在したらしい。また、大塚町にも古墳が存したといわれている。

旧荻藻川以西妙法寺川までの地域では池田寺町から池田広町へかけての山麓部に横穴式石室を埋葬施設とする群集墳があり、旧荻藻川西岸の河口近くの砂堆上に、雀塚・大水の子古墳など一群の群集墳が存在したらしい。

妙法寺川以西須磨浦までの地域では大手町に一群、若木町から月見山町へかけてに一群、潮見台に一群、そして須磨浦公園付近に一群の群集墳が存在した。

山田川流域 須磨以西では塩屋川流域および福田川東岸では存在が予想されながら確実な例は知られていない。
の群集墳

福田川西岸からさらに西側の山田川までにひろがる標高八二メートルあたりを最高所とする舞子丘陵上には、神戸市域でも有数の後期古墳群である舞子群集墳が存在する。

舞子群集墳は、江戸時代の『播磨名所巡覧図会』に「岩屋其数三十六有」と記されているように、多数の横穴式石室が群在することで古くより知られているが、現在、すでに消滅してしまった古墳も含めて四〇基

第二節 群集墳の時代

には本多聞群集墳があり、昭和四十五年（一九七〇）の団地造成に先立つ調査で、その内の一基から埴輪片、須恵器・土師器片、鉄器などが発見されているが埋葬施設は不明であった。出土した須恵器からみて五世紀末から六世紀初頭にかけて築造された古墳であることが知られている。おそらく



図 156 舞子群集墳分布図

に近い横穴式石室墳が確認されている。それらは立地する尾根によって一〇群程度の支群に分けられそうである。このうち東半の支群は、地形上からは山田川流域に属しているが、あるいは福田川流域を生活の基盤にした人々によって築かれたのではなからうか。

地形的には舞子群集墳の立地する丘陵の西端に位置する大蔵山古墳群にも、四世紀代の古墳や六世紀前半の前方後円墳とともに、横穴式石室墳と推定される円墳、木棺直葬墳と推定される円墳などが存在したことが確認されている。五世紀代の古墳は明瞭ではないが、おそらくこの流域の中心的な首長一族の墳墓であらう。

舞子群集墳の北約一キロメートル



写真 130 西石ヶ谷 4 号墳発見の須恵器

木棺直葬墳であろう。

大歳山の北側の山田川をへだてた西舞子九丁目あたりにも帝釈群集墳と呼ばれている横穴式石室を埋葬施設とする一群があり、六基の古墳が記録されている。しかし、小規模な宅地造成によって破壊されたためくわしい調査は行われていない。

大塚ヶ平

昭和四十年（二九六五）に調査された南多聞台七、八丁目あたりに位置した大塚ヶ平群集墳は一

群集墳

五基の横穴式石室からなる一群で、山田川西岸に分布する群集墳のなかでは最も規模が大きい。

墳丘はいずれも直径一〇～二六メートルの円墳で、群中最大規模の5号墳は直径二六メートル、周囲に幅

約五メートルの溝をめぐらし、石室の全長約一二・七メートル、最大幅約二・五メートルの片袖式の横穴式石室墳である。副葬品には須恵器、土師器、鉄器、玉類などとともに馬具の一部が発見されているが、調査前に乱掘されていて全容はつかめていない。

また、1号墳も全長約八・四メートルの片袖式横穴式石室を埋葬施設とする直径約一〇メートルの円墳であるが、榿、杏葉、雲珠、鏡、辻金具などの馬具が発見されている。

この群集墳でもう一基注目される古墳は15号墳で、片袖式の横穴式石室（全長約九メートル）を埋葬施設とする直径約一八メートルの円墳であるが、玄室内に縄掛突起をもつ組合せ式の家形石棺が埋納されていた。石棺は全長約

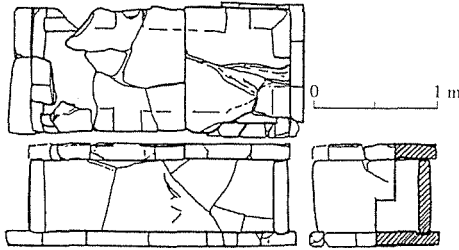


図 157 家形石棺実測図（垂水区大塚ヶ平15号墳）

二メートル、幅約一メートル、高さ約九〇センチメートル、蓋石二枚、側石四枚、底石四枚で構成された家形石棺で、蓋の長辺に各二カ所、短辺に各一カ所の退化した縄掛突起が付けられていた。石質は神戸層群中に認められる白色の凝灰質砂岩である。この群集墳の築造年代はおそらく六世紀はじめから一世紀間ぐらい継続したものであろう。

狩口台群

山田川下流西岸の狩口台群集墳には、いくつかの古墳が存在したといわれているが、現存するのは狩口台七丁目の狐塚古墳のみである。

狐塚古墳は直径約二五メートルの円墳で、周囲に二重の浅い周溝がめぐっているらしく、その外周は直径約五〇メートルに達する。埋葬施設は両袖式の横穴式石室で、全長は明らかではないが推定約八メートル、玄室の幅約二・二メートル、羨道の長さ約四メートル、幅約一・四メートルで、築造時期は出土した須恵器からみて六世紀前半でも終りころにあたる時期であらう。

深谷群集墳

大塚ヶ平群集墳の南側、狩口台二丁目あたりに存在した深谷群集墳は、大正年間に瓦製作用粘土の採土場となったため多くの古墳が破壊されたらしいが、昭和四十一年（一九六六）の明舞団地造成に先立つ調査で二基の古墳が確認された。

調査された古墳のうち蛇塚と呼ばれる1号墳は、直径約三〇メートルの円墳で、埋葬施設は全長約九・一メートルの片袖式横穴式石室である。玄室内には縄掛突起をもつ組合せ式家形石棺を収めており、副葬品のなかに轡・杏葉・雲珠・鏡・辻金具など馬具一式が含まれている。2号墳は直径約二五メートルの円墳で割竹形木棺三基を直葬していた。そのほか大正年間に破壊された古墳の多くは横穴式石室墳であつたらしい。

たつか群

集墳

南多聞台四丁目あたりに存在した、たつか群集墳は、標高七三〇六三メートルの丘陵上に立地していた横穴式石室を埋葬施設とする群集墳で、昭和三十八年（一九六三）に団地造成に先立って七基の横穴式石室墳が調査されている。コ字形にのびた尾根上に築かれた古墳は、北側の尾根上に東西に並ぶ四基と、中央の南北方向の尾根上にある一基、南側の尾根上の東西に並ぶ二基というように三小群にわかれており、いずれも円墳で南向の横穴式石室墳である。そのうち最も規模の大きいのは1号墳で直径約二四メートル、石室の全長約七・七メートル、副葬品のなかに馬具を伴っている。なお、馬具を副葬した例はほかに2号墳と6号墳がある。

西脇群集墳

たつか群集墳のさらに上流の西脇一丁目あたりに位置した西脇群集墳は、山田川西岸では最も上流に位置する群集墳で、六基の木棺直葬墳と推定される古墳が確認されており、なお南側の第二神明道路あたりにいくつかの古墳が存在した可能性があるという。そのうち1号墳は一辺約六メートルの方形墳で、墳丘斜面にはこぶし大の円礫の葺石が認められ、埋葬施設は長さ一・八メートル、幅四〇～五五センチメートルの箱形の木棺四基が発見されている。副葬品は須恵器のみで五世紀末～六世紀初めに築造されたらしい。ほかの五基は直径五～一〇メートルで、確認できた例はいずれも木棺直葬で単葬であった。

明石川流域

の群集墳

明石川流域では約二〇〇基の後期古墳が存在するが、明石川下流域では東岸の明石地域の明石城内に、あさぎり寮古墳と呼ばれる直径約一〇メートル、高さ約一・五メートルの円墳で木棺直葬を埋葬施設とする古墳が存在する。明石城内にはほかにも数基の古墳が存在していたらしい。

第二節 群集墳の時代

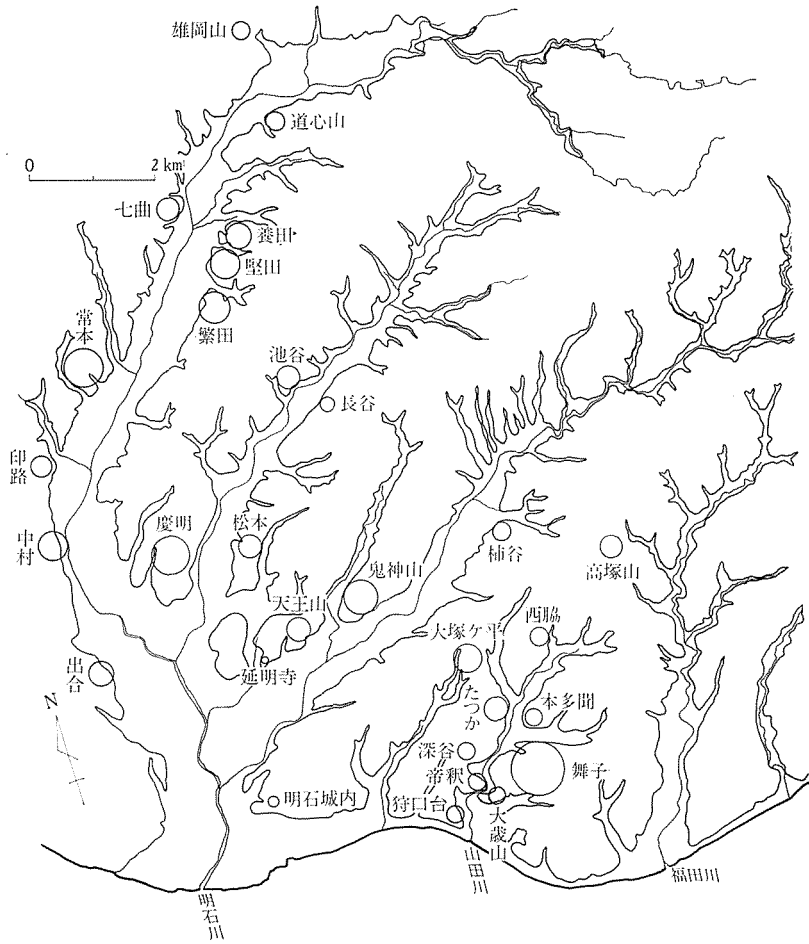


図 158 明石川流域の群集墳分布図

伊川東岸ではほとんど群集墳が知られていないが、小寺集落の背後の丘陵上に三基の円墳からなる柿谷群集墳が存在する。そのうち1号墳は直径約一四メートル、高さ約三メートルの円墳で周囲に埴輪をめぐらし、埋葬施設は礫床の上に木棺を置き、鉄剣・鉄鎌を副葬していた。埴輪のなかには、円筒埴輪のほか朝顔形埴輪・人物埴輪・家形埴輪などがあり、六世紀初頭の築造と推定される。ほかの二基も木棺直葬の円墳で六世紀前半の須恵器を副葬しているものと、六世紀後半の須恵器を副葬しているものがある。おそらく三世代にわたって同じ丘陵上に造墓した一集団の墳墓群であろう。福田川上流と伊川上流の中間の丘陵上には横穴式石室を埋葬施設とする高塚山群集墳が存在し、数基の古墳が知られているが、この群集墳を残した人々が、福田川流域と伊川流域のどちらに生活の基盤をもっていたのかは明らかでない。

伊川西岸では潤和じゆなの延明寺古墳が、箱式石棺の埋葬施設をもち、鉄鎌を副葬していることで知られており、付近にいくつかの古墳が存在する可能性がある。

天王山の一群は、比較的早い時期の群集墳であり、鬼神山周辺にも同時期の古墳およびそれに続くいくつかの支群が存在するらしいが、未調査のまま土取り工事で消滅してしまったものも多く、実態が把握しにくい。楯谷川流域では東岸の松本、長谷、池谷などで古墳の存在が知られており、埴輪の存在する古墳や銅鏡を副葬した終末期の古墳の存在も伝えられているが、その内容の明らかなものは少ない。

楯谷川と明石川中流に囲まれた丘陵地帯の東端には慶明群集墳と呼ばれている一群がある。また、居住・小山遺跡の一角からは円墳二基、方墳三基計五基の一群が発見されている。墳丘は削平されてしまっていて埋葬施設は不明であるが、木棺直葬墳であったらしく、出土須恵器からみて六世紀前半に築造されたもので

第二節 群集墳の時代



写真 131 木棺直葬墳
(西区西神第33号遺跡第1号墳)

あろう。丘陵上の木棺直葬墳と横穴式石室墳とが一群をなしている慶明群集墳と同一の群としてとらえられる。

明石川西岸には下流から上流まで、全域にわたって群集墳が形成されている。

下流域では沖積地に立地する吉田南遺跡で円筒埴輪が発見されているほか、吉田・片山遺跡の位置する西側の丘陵上からも円筒埴輪が発見されている。また付近の神社境内に石棺が保存されているので、この丘陵上に中期末にはじまる群集墳が存在していたことは確実である。弥生時代後期以後古墳時代を通して明石川下流域の中核的集落であった吉田南遺跡と深くかかわる群集墳であろう。

比較的早い時期に形成された群集墳には亀塚古墳を中心とした出合群集墳とさらに上流の中村の丘陵上に立地する中村群集墳がある。

中村群集墳よりさらに上流の印路いじや常本にも群集墳があり、いずれも木棺直葬墳であることが知られている。そのうち常本の群集墳は南側の保養所裏山群集墳と常本群集墳の二群に分けられるが、いずれも埴輪を伴う古墳を含んでいるので比較的早い時期から群の形成がはじまっていたものである。黒田にはやや大形の鍋谷池古墳があり、付近にも一群が存在した可能性がある。

また、和田にもいくつかの群集墳が存在したらしいが、藤

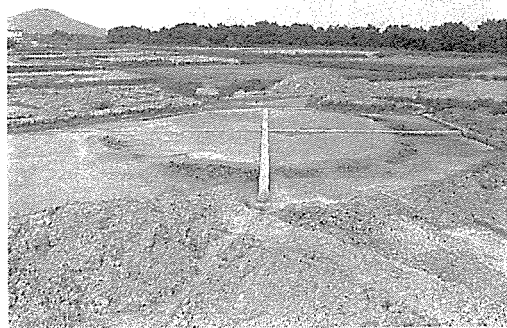


写真 132 新内古墳全景

原橋に近い七曲り群集墳は、土取り工事によってすっかり消滅してしまった。なお、藤原橋の北側山袖には須恵器の窯址と推定される土器散布地がある。明石川中流東岸では平野町宮前の丘陵上に西神第55号遺跡を中心とした一群がある。

標高六〇〜八〇メートル付近で三基の木棺直葬墳が調査されているが、そのうち2号墳は埋葬施設が割竹形木棺で、中期古墳だと推定されているが、他の二基は後期古墳である。

さらに上流へさかのぼると平野町繁田と同町堅田・押部谷町養田に、小さな谷をへだてて前・中期から後期へかけての古墳群がそれぞれ存在する。後期古墳の多くは木棺直葬墳で、群集墳の形成が六世紀はじめから始まっており、他地域に比してその成立が早い。

明石川上流の押部谷町細田^{さいた}では東岸の元住吉山・道心山の西岸の寺谷・池谷などに群集墳が存在するが、元住吉山・道心山は木棺直葬墳と横穴式石室墳が混在しているようである。

道心山群集墳のうち木棺直葬墳と推定される2、3号墳は、発見された須恵器からみて六世紀前半に築造されたと推定されるが、1号墳は、直径約二〇メートルの円墳で、周濠をめぐらし、埋葬施設は片袖式の横穴式石室である。石室の全長約五・五メートルで形態からみて六世紀後半に築造されたものであろう。

神出の群

明石川上流というよりも、むしろ瀬戸川の上流あるいは加古川の支流草谷川上流でもある神出集墳は、標高一〇〇メートル前後の高位段丘面に小さな谷を刻んだ台地で、少ないながらも古墳が存在する。

金棒池1号墳で発見されたと推定される銅鏡が宮内庁に保管されていることはさきにふれたが、東京国立博物館所蔵資料や記録にも同じ古墳から発見された可能性のある須恵器や馬具の一部である杏葉が存在し、また、神出町田井の字向山発見の鉄製武器や円筒埴輪も記録されている。

そのほか、兵庫県立博物館所蔵の福原会下山人旧蔵資料のなかにも、窯跡発見か古墳発見資料かは不明ながら神出町発見の陶棺脚部が存在し、神出地区においても中期末以来開発が進行し、人々の生活の場となったことが知られる。

最近の圃場整備事業に伴う発掘調査でも神出町東の大池の南側に位置する新内古墳あちうらをはじめ雌岡山南麓でいくつかの古墳が発見され調査されている。

新内古墳は直径約一七メートルの円墳で、周囲に約四メートルの周溝をめぐらしていたが、埋葬施設は削平されてしまっていて不明であるが、周溝内からは円筒埴輪・朝顔形埴輪のほか人物埴輪や須恵器も発見されている。

大池の北側で発見された仮称1号墳は、直径約一五メートルの円墳で、埋葬施設は全長約七・五メートルの横穴式石室であった。副葬品は須恵器・土師器のほか、ミニチュアの須恵器が発見されている。

1号墳の北側に接する2号墳もほぼ同規模古墳である。

1・2号墳から東へ約一六〇メートルの拍子ヶ池北岸に位置する3号墳は直径約一二メートルの円墳で、埋葬施設は不明であるがおそらく横穴式石室であろう。なお拍子ヶ池のなかにも古墳が存在するので、このあたりの六世紀末から七世紀へかけての一群の群集墳の存在とその内容がようやく明らかになってきている。

神戸北部

北神戸地区では弥生時代以来、武庫川に有野川が合流するあたりから、さらに有野川・長尾川の群集墳

に有馬川・八多川が合流するあたりに遺跡が集中している。これまでに知られている後期古墳も、そのほとんどがこの地域に集中しており横穴式石室墳が多い。

武庫川本流東岸の道場町生野から中野へかけての地域では、かなぶ鑛射山の山裾から中腹へかけて二〇基あまりの横穴式石室墳が四群にわかれて分布している。

この地域は、上流の三田市域や支流の有馬川や長尾川の流域に比して決して可耕地はひろくないにもかかわらず、このように古墳の数が多いため、おそらく武庫川をさかのぼる人や文化の流れの三田盆地への入口にあたっていていることと深くかかわっている事柄であろう。

武庫川本流と有野川が合流するあたりの南側丘陵先端部に位置する尼崎学園内群集墳は、現在六基の古墳が知られているが、群の中央に位置する4号墳は、直径約一三メートル、高さ約二・五メートルの円墳であり、埋葬施設は両袖式の横穴式石室で、玄室の奥壁に棚石が付設されていて注目される。

また、2号墳と6号墳は木棺直葬墳ではないかと推定されている。

尼崎学園内4号墳のように玄室の奥壁に棚を付設している古墳は三田市加茂の竹内古墳で知られているし、三田市北浦の東仲古墳では、玄室の側壁から棚が突出している例が知られている。

第二節 群集墳の時代

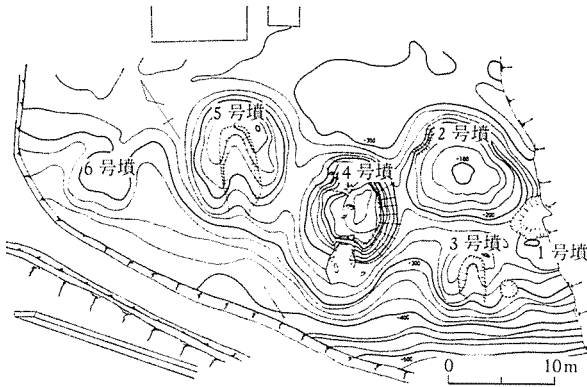


図 159 尼崎学園内群集墳丘測量図

なお、尼崎学園内群集墳の南約二〇〇メートルの道場町塩田の南所でも二基の円墳が知られているが、いずれも横穴式石室墳であるらしい。

有馬川東岸の道場町平田から西宮市山口町へかけての丘陵上には五基の横穴式石室墳が南北にならんでい

る。中央の稲荷神社裏山群集墳は三基確認されており、南約一〇〇メートルの丘陵先端部にも一基、南西約二〇〇メートルの丘陵上にも一基の横穴式石室が知られている。さらに西宮市との市境を南へ越えたところにも青石古墳と呼ばれる横穴式石室墳があり、一群を形成している。

有野川と有馬川の中間に東西にのびた丘陵の最北端の裾部に位置するオキダ群集墳は、五基の横穴式石室墳からなる一群である。調査された2号墳は、全長約八・五メートルの無裾式の石室であったらしく、石材の原位置を保ったものはなかったが、床面からは須恵器、土師器、直刀、刀子、鉄鏃、鋤先、鎌状鉄製品、馬具、釘、鏝、金環など多くの遺物が発見されている。そのうち轡三点をはじめ馬具一式が出土している点は注目される。

長尾町宅原から道場町自彊へかけての神戸市と三田市の市境を形成している丘陵上には点々と群集墳が分布している。そのうち東端の塩田八幡神社付近の一群は、さきにふれた山王社古墳を中

心とする下田中上古墳群と一連のものであろう。

北神ニュータウン造成地内にもいくつかの古墳が存在するが、そのうち北神2・3号遺跡では標高約八〇メートル、水田との比高約二〇メートルの丘陵上に二基の古墳が知られているが、そのうち3号遺跡は、全長約二九メートル、後円部径約一五メートル、高さ約二メートル、前方部幅約一二メートル、高さ約一・五メートルの小形の前方後円墳で、埋葬施設は片袖式の横穴式石室である。

隣接する2号遺跡の古墳は、直径約一二メートルの円墳で、埋葬施設は全長約八・七メートルの片袖式横穴式石室である。いずれも六世紀中葉以降の古墳である。

北神地区のうち、加古川の上流に属する山田町や淡河町では、近年まで古墳時代の遺跡はほとんど知られていなかったが、最近集落遺跡も含めて発見が相次いでいる。

加古川の支流美嚢川上流にあたる志染川(山田川)流域では山田・中遺跡で古墳時代前期および後期の堅穴住居が発見されているほか、近くの原野の谷寺や数ノ奥に群集墳が存在するといわれている。

また、淡河川流域では、淡河城址南辺で弥生時代末期から古墳時代初頭ごろと推定される方形堅穴住居が発見され、付近にはなお数棟の住居が存在するらしいことが知られている。しかし、古墳についてはこの地域での分布調査でも、まだ発見されていない。

以上のような群集墳の存在は、付近に古墳時代後期の集落が未発見であっても、それぞれの地域で農業生産に携わり、その地域の経済的基盤を支えた人々の営みが存在したことを如実に示しているものであろう。

終末期の古墳については昭和四十七年（一九七二）に奈良県高松塚古墳が発見されて以後、関心

古墳 が高まっているが、神戸市域ではその実例がほとんど知られていない。わずかに西区櫛谷町の光松古墳で銅鏡が発見されているので、遺物の上から七世紀代から八世紀はじめにかけての古墳の存在が推定できるだけである。

しかし、神戸市北区に接する武庫川中流の三田盆地には三田市貴志町の奈カリ与古墳、奈良山12号墳、西山7号墳、同市福嶋町の青龍寺裏山古墳群など終末期古墳の好例がいくつも知られている。

武庫川西岸の丘陵上に位置する奈カリ与古墳は、直径七く八メートルの円墳で、埋葬施設は凝灰岩質砂岩の板石を組合せた横口式の石槨である。これは箱式石槨様石室とも呼ばれているように、長さ約一・六メートル、幅約七〇センチメートルの小形の石室で、入口は片側に寄っている。発見された須恵器からみて七世紀の前半に築造された古墳であろう。

奈良山12号墳は直径約一〇メートル、高さ約一・五メートルの円墳で、埋葬施設は奥行約一・一メートル、幅約八五センチメートル、高さ約一メートルの横口式石槨で、刳抜式の横口壁をもち、その前に羨道をつけている。埋葬に際しては柩内全面に木炭・灰が敷きつめられており、火葬墓として築かれたものであろう。発見された須恵器からみて七世紀前半から中葉へかけての古墳であろうと推定されている。なお、この石槨には九世紀末ないし一〇世紀はじめに追葬が行われている。

西山7号墳も直径約一二メートルの円墳で、埋葬施設は木槨を直葬したものと箱式石槨が各一基ならんでいる。そのうち箱式石槨の墓壙が横穴式石室のそれと同じように玄室部の前に羨道状の壙がのびている。石

棺は長さ約九一センチメートル、幅約三〇センチメートルであり、棺内全面に木炭や灰が敷きつめられている。おそらく七世紀前半の古墳であろう。

奈カリ与・奈良山古墳群の対岸に位置する青龍寺裏山古墳群のうち、1号墳は直径約一〇・五メートル、高さ約二メートルの円墳で、埋葬施設は全長約三メートル、幅約一メートル、現高約一メートルの石室で、床に長方形の磚を敷いた古墳として著名である。この石室については堅穴式石室・横穴式石室両説があるが、おそらく後者であろう。

1号墳の東側にならぶ2号墳も板石を組合せた石棺状の遺構が認められるが、おそらく横口式の石槨であろう。

以上のような三田市域における終末期の石槨は、規模が著しく小さいこと、木炭や灰を伴う例が多いことから推測して、仏教的葬法と関連深い火葬墓あるいは改葬墓として築造されたものであろう。